

岡田良一郎言論関係文書の紹介(二)

大 藤 修

目 次

本号所収文書について

以下、「敬齋議草」所収

③ 明治五年「対問」

④ 明治六年五月二日「建下院之建議」

⑩ 明治六年四月二三日「官ニ任スルノ議」

⑪ 明治六年四月二四日「府県日誌ヲ発スノ議」

⑫ 〈明治六年〉「停奢侈行勸儉建議」

⑬ 〈明治六年〉「教学之議」

⑭ 明治六年五月「勸儉論」

⑮ 〈明治六年〉「劉三浦氏ノ濫惠」

⑯ 〈明治六年八月〜同七年四月〉「草木耕種法ヲ刊行スルヲ

請ノ建議」

⑰ 明治七年四月「奉送石黒某郎君航于米州序」

⑱ 明治八年五月一三日「勸業ニ付建言」(仮題) 浜松県令

林厚德宛

⑲ 明治八年六月一六日「建言」 元老院宛

〈 〉内の年次は推定。

本号所収文書について

本号では、『敬齋議草』と題された文集に収められている文書を紹介する。この文集は、明治五年〜同一五年の間に良一郎が草した建言書・意見書等をまとめたもので、日本の「近代化」が強力に推進されたこの時期、政治・社会の現実を、遠州の一豪農であった良一郎がどのように認識し、また「報徳主義」に立脚して、近代日本のあるべき姿をどのように構想したか、を知る上で貴重な資料である。のみならず、明治初期の言論史一般を研究する上でも役に立

とう。

ただ残念ながら、筆者が大日本報徳社所蔵の岡田家文書の閲覧に訪れた際には、『敬斎議草』の所在が不明であった。しかし幸い、明治大学の方々が岡田家文書を調査された際、この文集をコピーされていたので、渡辺隆喜氏よりそれを借覧させていただくことができた。氏の御厚意に対し、深く感謝の意を表したい。

本号において、この文集の全部を翻刻紹介したかったのであるが、時間の余裕がなく、半分足らずしか果たせなかった。残りの部分については他日を期したい。

以下、本号所収の各文書について、その主題を紹介しておこう。

⑧明治五年「対問」は、この年、教導職に示された国民教化の基本大綱「教則三条」について、浜松県教導職幹事近重八潮彦より尋問されたのに対して答えたものである。彼は、まず人心を感発させた上で三条の趣旨を説くのであれば効果はない、人心を感発させるためには、敬神の念を国民に植えつけるのが最善の方法である、と言う。なぜなら、「人心ハ畏怖スル処ヨリ興」るのであるから、人々をして畏怖せしめるためには、超越的な「神」に対する崇敬の念を涵養することが必要なのである。幸い日本は「神州」であり、その「赫々タル神威」は、「孩提ノ童モ其敬セサルヘカラサルヲ知ル」ところである。したがって「苟モ善ク是ノ良智ヲ誘テ人道ヲ明ニスルコトアラハ、誰カ敢テ朝旨ニ戾ルモノ有ンヤ」と、彼は説く。ただ「神ノ神タルヲ説ハ人ニ在リ」、結局のところ、国民教化が実をあげるか否かは教導職の人材如何にかかっている、としている―これについては、⑨で具体的に述べている―。

「神ヲ敬スルハ善ヨリ大ナルハナシ」、「善ハ国ヲ愛スルヨリ大ナルハナシ」と、彼にあっては、敬神とは愛国の善の実践である、と考えられている。だが、それは、単に「皇上奉戴、朝旨遵守」のみでなく、「鰥寡ヲ恤ミ小恵ヲ行フ、亦是即チ敬神ノ道ノミ」と考えている点に留意する必要がある。窮民救済は報徳道の重要な実践課題であるが、それ

はとりもなおさず「敬神ノ道」でもあったのである。彼は、国民が「敬神ノ道」を実践すべきことを説くだけではない。国家に対しても国民の福利を図るべきことを要求し、それが国民をして「敬神ノ道」を実践せしめる前提条件である、と主張する。すなわち、「之ヲ守ルニ福祿ノ至ルナケレハ何ヲ以テカ道ニ勸マン」と。

右は、彼の生涯にわたる言論と実践活動を貫く基本的見地である。報徳主義は「富国安民」の実現を目的とする実践哲学であり、それを実現するためには、官と民が相和し協力し合う必要がある、と説かれる。尊徳が自ら領主の行財政を指導することによって仕法を実施したのも、そのためであるし、報徳仕法を受容した岡田佐平治（良一郎の父）も結社を基盤としながら、掛川藩の行政と結びついた形で仕法を行なっている。良一郎もまた、常に官に働きかけながら事業を行なっているし、自ら官吏となつて行政を担当したりもしている。彼が自らの所見を県や国に度々建議しているのも、右の見地から理解し得よう。

⑨ 明治六年五月二日「建下院之建議」、⑩ 同年四月二三日「官ニ任スルノ議」、⑪ 同年四月「府県日誌ヲ発スルノ議」、⑫ 同年「停奢侈行動儉建議」、⑬ 同年「数学之議」、⑭ 同年五月「勤儉論」は、⑭の末尾に「右、立下院以下数篇、於東京支庁草之」とあり、明治六年四月、浜松県庁に出仕することになった良一郎が、任官するや直ちに地方官会同出席のため、林厚徳県令に随行して上京した際に草したことがわかる。

⑨は、「民ヲ自由ヲ得セシムルモノ君民同治ヨリ善キハナシ」という考えに立つて、「君民同治」を実現するためには下院を設ける必要があることを建議したものである。彼はまず一般論として、「君主專治ノ弊タルヤ、民権ヲ抑制ノ下モ情ヲ陳ル不能、情陳ル不能ハ民悶々、上下情ヲ異ニノ事乖離ス、外患之ニ乗、人傍觀ス」と、君主專治は国家滅亡の危機を招来することになることを指摘する。しかるに、現在の我が国は、「天子ノ国タリ、其興亡ハ専ラ政府ニ関スレハ、国民ノ与ル所ニ非スト」という状態である。興国を図らんとすれば、国家と国民が禍福を共にし、「国必天

下ト与ニ守リ、事必天下ト与ニ議ス、天下ノ民ヲ天下ヲ憂フルノ心ヲ存セシム」ことが必要である。一刻も早く下院を設けて、「君民同治」の「文明ノ治」を実現せよ、と彼は主張する。そして自ら、下院の理念、下院議員の選出方法、役割・機能等について九カ条からなる條款を作つて示している。ただ、「其精良ニ至テハ君子宜シク外国ノ法ヲ斟酌、ノ條款ヲ定ムベシ」としている。右の條款のうち第九条では、府県においても議院を設置すべきことを規定している。彼は、後述する如く、風俗・規範の面では我が国固有のあり方を重んじ、文明開化の弊害を批判しているが、政治制度の面では外国に倣い、人民の権利を認めて「文明ノ治」を開くことを主張しているのである。ただ、それも、明治八年の元老院宛「建言」で述べている如く、あくまで日本固有の「国体」の維持を至上命題とした政体論であり、それを損なわない範囲での民権の容認である。

⑩では、県政と政府との関係について述べている。政府が県の行政について細かいところまで指示したのでは、県官は自分の才能を発揮する余地がなくなり、別段有徳の者を登用する必要もない。しかし、それでは県政は発展しない。県官に有徳の者を登用し、政府は県官に行政の大綱のみを示し、細目は県官に任せれば、県官は十分にその才を発揮して、県政は発展する。ただ、そうした場合、「各県其治ヲ異ニス」るおそれがあるが、それは、政府が巡察使を派遣して県政を監督し、「歳次会同」を開いてその治の当否を論じ、是正を図ればよい。

以上の如き主張は、良一郎自身が県官に登用されたばかりであり、自己の才を存分に発揮したい、と意気こんでいたことが直接的動機をなしていたと思われる。また、⑨での府県議院の設置の要求と併せ考えると、政府の中央集権的な専制政治を拒否し、府県政の主體的な運営＝自治を主張したものと、解し得よう。

⑪は、⑩と同様、府県政は自主的に運営さるべきだという主張を前提に、「各県自ラ治ヲ異ニスルノ憂ナキ」ようにする方法として、各府県が日誌を発行すること、すなわち「各府県細大ノ事務、之ヲ施スノ日ヲ以テ即チ登梓シ、

政府ニ達シ、府県ニ領ツ、販売ヲユルノ民ニ偽リナキヲ示シ、亦広ク其得失ヲ觀ル」ことを提案したものである。

⑫では、まず、「方今天下ノ俗文明開化進歩駸々、雖然事或ハ奢侈ニモ属スル有リ、事或ハ私利ニ属スル有リ、是亦開化ノ一病」と、文明開化がもたらした病弊面を指摘している。そして、「奢侈」・「私利」は決して「生財富國ノ道」ではなく、「百万ノ家破産」の危機を招くものと断じている。「智ヲ回ラシオヲ馳テ」私利を圖り、たとえ「一朝百万ノ産ヲ突起スルモ」、それは決して「天下ノ財ヲ生スル」ものではない。なぜなら、それは「人ノ損失ヲ網羅ノ己レノ産ヲ起スモノ」であり、「天下終ニ利ヲ競フ」ことになるからである。彼は、「夫レ政ノ貴フ所ハ、智愚賢不肖齊シク其保護ヲ被ルニ在リ、生財ノ道偏ク施ノ広ク行フヘカラシム」というのが、為政の理念でなければならぬ、とする。では、「何ヲカ生財ノ道ト云」うのか。「勤儉」こそが「生財ノ道」である。なぜなら、「勤儉ノ生スル所ノ財ハ人ヲ網羅スルニ非ル」からである。このように主張した上で、彼は「天下ヲノ勤儉ナラシムルノ策」を建議している。そして、「外国ニ誇ルニ勤儉ヲ以テノ修驪ヲテセス」と、「勤儉」こそが我が国の誇るべき美風である、と強調している。以上のように、伝統的な「勤儉」思想に立つて文明開化の病弊を批判し、尊徳の論を継承して「富國安民」の方途を建議している。

彼はすでに⑧において、我が「神州」における固有の「敬神ノ道」を教えることが国民教化の理念であるべきで、教化が実をあげるためには、「神ノ神タルヲ説」くことのできる者をしてその任に当たらせねばならない、と主張していたのであるが、⑬では教師の資格について具体的に論じている。

すなわち、教師たる者は「教学相兼ル」必要がある、と言う。「教」とは、「衆ヲ化」し、「天下ノ智愚孳テ以テ其教ヲ奉セシム」ことである。「学」とは、「智ヲ開ク」こと、つまり「修身齊家治國平天下ノ事ヨリノ天地事物ノ理ニ至ル推窮、以テ人世ニ用タラシム」ことである。では、誰をもつて「教学ノ任」に当てさせたらよいか。彼は、僧侶も

洋学者も儒者も不可とし、「教学ハ祠官ノ専任タルヘシ」とする。そして、僧侶・洋学者・儒者を用いる場合は、祠官とした上でせよ、さすれば「彼レ既ニ祠官タレハ、神ニ事ルノ心ヲ以テ教ヲシク、仏者ト雖モ仏ヲ説クコトヲ不得、洋学ト雖モ邪蘇ヲ説コトヲ得ス、儒ト雖モ専ラ堯舜ヲ説コトヲ得ス、都テ敬神愛國ノ教ニ服シ、而我カ神州ノ道始テ復焉ニ立ツ」と言う。

こうした主張の根底には、「抑教法ノ仏ニ帰シ、文学ノ儒ニ帰シ、神官ノ虚器ヲ擁スル久シ、之ニ加ワルニ洋学ヲ以テス、神道殆ント将ニ絶^(絶カ)ントス」という危機感が存した。それ故、「我カ神州ノ道」の復活を求める彼の主張は、激しく、徹底したものとなったのであり、「他日仏寺ノ衰ル、葬祭都テ祠官ニ帰シ、一教確立、必彼ノ西洋諸州ノ邪蘇ニ於ルカ如クナルヘシ」と、我が国の宗教は神道一教に統一されるのが望ましい、とさえ言っている。

⑭は⑫と同じく「勤儉」こそが「生財ノ道」であることを論じたものであるが、ここでは、天下の人々をして「勤儉」を実行せしめるためには、まず法でもって強制する必要があることを強調している。「人ハ云へ、学以テ自ラ儉ヲ知ラシメン、吾ハ云、法以テ儉ナラシメ、儉以テ学ヲ起シ、学以テ其然ルユエンヲ知ラシメン」。事をなすに当たっては、まず法を立てて制度化し、強制力を及ばさねば成就し難いという考え方は、良一郎の思考様式の特徴の一つである。ただし、その法は「天下共ニ之ヲ守テ妨碍ナキモノニシテ、政府ト富民ト智者ト奇巧者ノミ独リ其幸福ヲ受ルニアラス、人民ト貧者ト愚者ト拙夫ト与ニ其幸福ヲ共ニスヘキ」ものでなくてはならないのであり、この点に留意しておかないと、彼の主張の真意を理解し得ない。

報徳思想においては、「儉」は「分度」と結びつけられて説かれる。すなわち、収入に応じて支出に限度を設け、節儉してその枠内で計画的に財政を運用せよ、というのである。収入よりも支出を少な目に見積もって「分度」を設け、儉約によってその「分度」を守れば、余剰が生ずる。そして勤勞して収入を増やせば、余剰も増大する。この余

剩を自己の将来のため、子孫のために譲り（自讓、すなわち貯蓄）、また他人・社会・国家のために譲る（他讓）のが「推讓」である。

良一郎もまた、「分ニ從テ財用ノ度ヲ節制スルハ上下一般ノ儉也、夫レ上儉ヲ貴フ時ハ財用足ル、下儉ヲ貴フ時ハ国不_レ乏、賢智者儉ヲ貴フトキハ愚不肖者不_レ修」と説く。そして、「政府儉ヲ貴ヘハ国用足ル、器械ヲ製シ、土地拓テ物産ヲ増殖ス、航海ヲ務メ貿易ヲ隆ニシテ八荒ヲ驅馳ス、国民皆儉ヲ勤メテ余財ヲ生ス、余財ノ才国益ヲ興ス」と、政府と国民がそれぞれ余財でもつて殖産興業、国益増進を図ること―すなわち「推讓」―を要求する。さすれば「天下国家ノ利」をあげることができる、と彼は言う。

「国民ノ富ハ政府ノ富ムユエンナレハ、称ノ天下ノ富ト云コトヲ得ヘシ、政府ノ富ハ国民ノ貧ナルユエンナレハ、称ノ天下ノ富ト云コトヲ不得」。国民の富こそが天下の富の基礎である、と彼は考えているのである。逆に政府が無理に増税をして富んだとしても、それは国民を貧窮させるもので、天下の富とはならない。明治八年の元老院「建言」の「征韓ノ義務独リ之ヲ兵ニ委スヘカラサルヲ論ス」の項で、彼は、「^(彼)歛ヲ厚フセスノ府庫充チ、税ヲ増サスノ国用足ル」方法として「儉ト勤」を論じ、これは「先ツ国用ヲ足シ、人民ヲノ殷富ナラシムルノ方」であると評している。

ところで彼は、奢侈ノ風、私利の追求を文明開化が生み出した病弊であると批判しているのであるが、だが決して文明開化そのものを否定しているわけではない。それは、「文明ノ治」として「君民同治」の実現を主張している点からも知られるが、ここでは次の言に注目したい。「贅沢奢侈ノ器物ヲ不製、衣服有制、金銀有禁、惡弊ヲ改メ風俗ヲ正シフノ、天下ノ民ヲハ大ニ開化ナラシムヘシ、抑我カ国俗自カラ窮理經驗ヲ為ス不能ノ、喜テ人ノ跡ヲ襲フ。つまり、主体的に物事の理を窮め、善惡を判断し得る「智力」を開くことが、彼の言うところの「開化」なのである。

⑮「明治六年」「劉三浦氏の濫惠」は、「東京日々新聞四百三十一号」（明治六年七月二三日刊）に三浦なる人物が入水の婦人を助けた記事が載っているの読み、感想を認めたものである。彼は、三浦氏が婦人を助けた上に金を恵んだ行為について、死を免れただけでもその婦人にとつては至上の恩恵であり、それに別に貧乏しているわけでもないのに金まで恵んだのは、濫惠である、と批判している。「凡ソ賞ノ貴フ処ハ、以テ節義廉恥ヲ勸ムルニ在リ、惠ノ貴フ処ハ、貧ヲ賑フシ業ヲ励マスニ在リ、而ノ其時処ヲ不得ハ、二者モ亦可トセス」というのが、「賞」・「惠」についての彼の考え方であり、三浦氏の行為は下心から出たもので真の「惠」ではない、と断じている。

⑯「草木耕種法ヲ刊行スルヲ請フノ建議」は、「権少属岡田良一郎」という署名になっている。浜松県権少属となつたのは明治六年八月一四日であり、翌七年四月二〇日に浜松県少属に昇進している。したがって、この期間に草したものであることが判るが、確かな年月日は不明である。

内容は、佐藤信淵が著わした「草木耕種法二十卷・培養録二卷・土性弁一卷」を、「草木樹芸百穀稼穡培養ノ法頗ル精微確實ナリ、蓋其人博聞強識、倭漢ヲ該ネ、洋学ニ通シ、究理経験至ラサルナシ」と高く評価し、「国家有用ノ書」である故、これを刊行して、その農法を天下に広めるべきことを建議したものである。宛名は記していないが、内容からみて、浜松県令に建議することを予定して草したものと思われる。

信淵の農書に対する彼の評価は、父佐平治がその農法を試みたところ、「其効ヲ得ル頗ル多」く、「信淵ノ学席上窮理ノ論ニアラスノ、親ラ経験スル処ナルヲ」確信したことに基づいている。良一郎は、「物産ヲ盛ニスル」基本は、「耕種培養ノ法」を施して土地生産力を高めることにあり、「徒ニ山川ヲ平ニシ原野ヲ開拓スルヲ以テ専務トスヘカラス」と言う。つまり、農業の集約性を高めることが勧農の基本だと考えているのである。この観点から信淵の農書を推奨し、幸いこの頃自分は「資産金ノ方法」を立て、その事に関与しているので、それを資金としてこれを上梓

し、管下に頒ち、天下に流布させ、「文明ノ 聖世人民開智、物産蕃殖ノ一助タルコトヲ得ン」と建議している。ここでいう「資産金ノ法」とは、明治六年八月に彼が県令に建議し、同年十一月に設立された「資産金貸付所」を指していることは疑いない。人民をして開智させることが、勸業の実をあげる基礎である、と彼が考えていたことが知られるよう。

⑩明治七年四月「奉送石黒某郎君航于米州序」は、浜松県参事石黒明公使郎が米国に留学に赴くに当たり、浜松官舎での飲送会で手向けに詠んだものである。

⑪明治八年五月一三日「勸業ニ付建言」は、当時浜松県少属であつた良一郎が、浜松県令林厚徳に対し、法を設けて勸業に力を入れるべきことを建議したものである。彼は、立法の目的、地方官の責務、為政の役割について次のように言う。

法ノ設クル、固ヨリ民ノ權利ヲ得セシムルニ期ス、民ヲ率ヒテ權利ノ域ニ至ラシムルハ、蓋シ地方ニ官タルノ務メニシテ、何ソ之ヲ拘束ト云ハン、苟モ此務ヲ廢シ、人民各自其私ヲ縦マ、ニセシムルヲ以テ自由トセバ、何ゾ又政ヲ為ヲ用ヒン

彼はすでに、⑨において人民に「自由ノ權」を付与すべきことを主張している。右でも、立法の目的は人民に權利を得せしむるにあるとしているが、しかし、それは決して各人が恣に振る舞うことを容認するものではない。既述のように、彼は私利の追求を排撃している。公利公益に悖らないことを前提に、個人の「自由ノ權」は認められるのである、両者の調整をはかるのが為政者の役割なのである。

ところで彼は、⑩において、農業の集約性を高めることによつて物産増殖をはかるべきことを主張したのであるが、それだけで事足れり、と考えていたわけではない。ここでは、渋沢栄一の「凡ソ物産土宜ヲ以テ称スルモノ、其

製作ヲ精ニセサル可カラズ、而シテ世人多ク通商ノ道ニ昧シ、徒ニ蕃殖ノ多カラザルヲ憂フ、品物狼戾、価亦随テ下ル、其管テ利タルモノ適以テ破産ヲ資ルニ足ル、蚕ト茶トノ如キ是ナリ」という言を、まさに知言であるとして、製造技術の改良によつて製品の質を精良にすべきこと、および通商の利をはかるべきことを建議している。特に、遠州の重要産業である製茶業に即して述べている。

明治八年六月一六日「建言」は、(一)「制勢」、(二)「貢賦」、(三)「其二」、(四)「其三」、(付)「士族授田」、(五)「庶平民爲士」、(六)「責士道」、(七)「征韓ノ義務独リ之ヲ兵ニ委スヘカラサルヲ論ス」、(八)「時辰機」、(九)「理財」から成り、この時期、日本が当面していた諸々の課題について元老院に建議したものである。ここには、この時期の良一郎の思想の全体像が示されている。ただ、渡辺隆喜氏より借覧したコピーでは、(六)が抜けており、残念ながら、今回はこの部分を割愛せざるを得なかった。原物が見つかり次第補いたい。

さて、明治八年四月一四日、元老院・大審院・地方官會議を設置し、漸次立憲政体を樹立する旨の詔勅が出されたが、良一郎はこれを、「聖誓ノ意ヲ拡充シ、茲ニ元老院ヲ設ケ、以テ立法ノ源ヲ広メ、大審院ヲ置キ、以テ審判ノ權ヲ鞏クシ、地方官ヲ召集シ、以テ民情ヲ通シ、公益を図リ、衆庶ト俱ニ其慶ニ賴ント言ヲ求メテ不厭」と歓迎し、早速、元老院に対し建言に及んでいる。時に良一郎、三五歳八カ月であった。

(一)では政体について論じている。「制」とは制度のことであり、「天下ヲ永ク永安ナラシムルモノハ太政ノ制」である。「勢」は「天下ノ大勢」を意味し、「制勢ニ從ヘハ、則制シ易ク、政其制ヲ得レハ、則治安窮リナシ」という。

「勢ニ從フ」とは、「天下人心ノ向フ処ニ從フ」ことである。「制ヲ得ル」とは、「国体ヲ不失」ことである。が、彼は、「雖然」として次のように言う。

勢從フヘカラサルアリ、民權ヲ重ノ君臣ノ大義ヲ疎ニシ、文明ヲ貴テ天下修靡ニ赴クカ如キ、是也、国体ノ變更ナ

キ不能モノアリ、天下ノ治乱独リ 皇室ノ安危ニ関スル、是也

彼は先に、①において、人民に權利を付与し「君民同治」を実現すべきことを主張している。だが、「国体」を危うくするほど民権が伸長することに対しては、警戒の念を抱いていたことが右の言から知られる。彼は、「皇室・政府決ニ相混同スヘカラサル也、夫レ之ヲ混同ス故ニ、古ヨリ天下乱ルレハ 皇室先ツ危シ」として、「皇室・政府ノ別ヲ立」てるべきことを建議している。

彼は、皇室・天子について以下の如く説明する。「皇室ハ即チ天子ノ私家也、…(中略)…而ノ其富ヲ論スレハ、天下ノ冠タリ、其人種ヲ論スレハ、天神ノ孫、其統ヲ論スレハ、万古一統、其恩沢ヲ論スレハ、二千五百余年海内ニ充溢ス、(中略)…其至尊至重ナル如此、要スルニ天下人民ノ長々之ヲ君トナス、君以テ天下太政ノ主タルヘシ」。他方、政府は太政官と諸省の総称であり、「国脈ヲ維持シ、君民各自保護ヲ受ル為ニ共立スル処ノ司庁」である、とする。官員の主は君主であるが、しかし、決して皇室と政府を混同してはならない。

では、どうすればよいか。皇有地を定め、税も別立てとして、皇室の費用と政府の費用を区別せよ、と言う。その場合、皇有地を別個に設定するのではなく、「人民所有ノ券状ニ就テ、各其幾分ハ 皇有地、其幾分ハ民有地ト定メ、地券面ニ内訳スヘシ、而ノ 皇有地ハ万代不朽 皇室ノ私有トシ、政府ニ不関ノ其貢租ヲ人民ヨリ 皇室ヘ納ムヘシ」という形態をとるべきだとする点に、良一郎の主張の独自性がある。それは、「政ハ君民同治、天下ハ則君民共有、天下ノ治乱ハ専ラ 皇室ニ不関、而政府ノ仁暴ハ君民一般ノ苦楽ニ関ス」という考えに基づく。彼の「君民同治」の政体論は、「天下ハ則君民共有」という理念に基礎づけられているのである。

〔二〕では、右の如き政体構想に応じた税制のあり方を論じている。すなわち、皇室と政府の区別に対応して、税もそれぞれ別立てで収めるものとする。皇室に納める税を「貢」という。これは皇田に課されるものであり、定額とし、

「入ヲ量テ出ルヲ為ス」ものとする。他方、政府（太政官・諸省）に納める税を「賦」といい、皇室ノ禄ト士民ノ田ト天下ノ戸ロニ課ノ出サシム。つまり、君民共同負担とする。しかも、「賦ハ定額ナシ、出ルヲ量テ入ヲ為ス」とする。これは、「故ニ政府財用ヲ濫リニスレハ、君民共ニ苦ム所タリ、政府財用ヲ節スレハ、君民共ニ楽ム所タリ、楽ミモ天下ト共ニシ、苦ミモ天下ト共ニス、天下ノ治乱・安危・存亡・禍福・吉凶、君民必ス之ト共ニス」と言うように、君民が共立するところの政府に対し、君民を共通の利害關係に置くことにより、君民両者をして政府の専横を抑制せしめ、「君民同治」の実をあげんとする意図に基づく。

また、府県の費用は、その長次官の月給は天下に賦し、判任官以下の役人の月給その他一切の費用は所轄に賦す。堤防・橋梁・道路の修築は、一等は天下に、二等は所轄に、三等以下はその地に賦す。海關税は天下に均分し、釀造諸税は府県の所轄に均分して、それぞれの賦を補う。以上の如く建議している。

曰では、何を基準に貢賦を課すべきかを論じている。彼はまず、地価を基準とすることについて、地価は諸条件によつて常に変動するものであり、「常ナキ代価ヲ拳テ常アル貢賦ヲ課セント欲ス、恐ラクハ其平ヲ得難カラシ」と批判を加える。そして、「抑モ地価ハ末也、收穫ハ本也」、故に收穫を基本とすべきだと主張する。その場合、土地の生産力を最もよく示す指標は小作入米・金だとして、「其土地旧来ハ大法ニ従」い「土地ノ難易ニ依テ小作入米・金ヲ定」め、これをもつて村高とし、貢賦を課する基準とすべし、と建議している。つまり、旧来あくまで私的なものにすぎなかった地主・小作慣行を、国家の土地制度・税制の基礎に据えよ、というのである。「貢賦台帳ヲ製シ、反別收穫・小作米ヲ記シ、地主・小作連印ノ出スベシ、而シテ地主、小作ノ入米ヲ増サントスル、必官ノ許可ヲ得テ増スヘシ、小作、地主ノ入米ヲ減セント乞フモ、官ノ許可ヲ得サレハ、減スルヲ得ス、苟モ私ニ増減スル、必有罰」。小作入米額が公的に確定されたならば、最早、それは私的に増減することは許されない。そこでは、地主の恣意も排除され

るが、同時に小作人の恣意も排され、地主的収取は公的に保障されることになるのである。

四では税額について述べている。まず「厚税薄地ハ民貧ニノ戸口減損ス、薄税良地ハ戸口増加ス」と前置きした上で、「貢ハ必天下均シク幾分ノ一ヲ納ムヘシ、賦ハ従前ノ税額ヲ斟酌シ、貢賦ヲ合セテ従前ノ額ヨリ増ス者ハ、二十年以内ノ年季ヲ定メ、割賦高ノ内若干ヲ減免スヘシ、年季ノ内年々其高ヲ引起シテ漸次増加スルトキハ、民自カラ其堵ヲ得、騒擾流離ノ憂ナカルヘシ」と建議している。

また、この項では、士族授田について、以下の如くその方策を建議している。家禄奉還以前の士族の禄は四百万石で、天下ノ田租約千二百万石の三分の一に当たる。そこで、田租の三分の一を減免し、代わりに四百万石の作益のある土地を出させ、これを士族に授ける。すなわち、「天下ノ士挙テ田土ニ就クコトヲ得、於是貢ヲ収メ賦ヲ課スルニ新制ヲ以テス、新制ノ施ス所、士農維一、其族ヲ問ヘハ即チ士、其事ヲ問ヘハ即チ農、徴兵招募其勇ヲ択ミ、任官登職其賢ヲ撰ム、徒手素餐ノ人一朝地掃テ尽ク、富国強兵ノ策之ヨリ急ナルハナシ」。だが、貧戸の所有地を取り上げることは、抵抗が予想される。その場合は、代金を納めさせる。土地を出すか金を出すかは農民の希望に任せる。同様に士族に対しても、希望に応じて土地か金を与える。

右の如き措置を講ずれば、「天下ノ士民其レ一ニ帰スルニ庶カラシ」。されば、「平民ノ称ヲ廃ノ士トス、以テ天下ノ義務ヲ責ムベシ」と、彼は言う。そして、次の因で具体的に論じている。

因では、万国対峙の中にあつて、いかにしたら国家の自立を圖かれるかを建議している。「国ノ外侮ヲ受ルハ国自立ノ權ナキヲ以テ也、国自立ノ權無キハ人民ノ自立スル不能ヲ以テ也」―彼は、人民の自立こそが国家自立の根本である、と主張する。しかるに、人民が自立し得ないのは「義氣」が無いからであり、「其義氣ナキハ政府ノ抑制ヲ受レハ也、其抑制シ易キハ称シテ平民ト為ハ也」と断じ、「今敵国海外ニ森列シ睚眦必報ユル時ニ當リ、人民ノ義氣ナ

キ如此ハ、何ヲ以テカ之ヲ防カン」と危機感を喚起している。

では、どうすればよいか。彼は、政府の人民抑制の手段となつてゐる士族・平民の区別を廃し、平民もすべて士とし、「士民ヲ一ニシ与ニ国家ノ義務ヲ担任」せしめ、「義氣」を涵養させよ、と言う。江戸時代においては軍事・政治面の義務は武士が担つていたのであるが、それを人民にも担わせ、軍事面では「海内皆兵」、政治面では既述の如く「君民同治」とし、官吏も身分にかかわらず有能な者を登用せよ、というのである。また他方、徒手素餐の人間をなくし、すべての国民に貢賦負担の義務を担わせるべきことは、先の士族授田論で主張しているところである。こうした彼の主張は、身分によつて天下国家に対する役割が固定されてゐた近世の身分制の完全な否定を意味する。彼は、「士ハ賢不肖トナク其禄ヲ世ニシ、平民智愚ヲ不論田野ニ負担スルニ中略」彼ヲノ概ノ不学無術ノ士タラシメ、之ヲノ概ノ卑屈無機ノ民タラシム、流弊ノ如斯豈済フ無ルヘケンヤ」と、近世の身分制を批判している。そして、逆に中世の兵農未分離の状態を理想化し、自己の主張の根拠としている。

ところで、士民に同等の義務を担わせることは、權利においても同等たることを要求するものである。彼は内において、王政復古以来、平民の權利は伸長してきたが、「雖然平民ノ權利未タ士ニ不及」と言う。そして、この格差を、平民を土に上昇させることによつて解消すべし、とする――士族を平民に下したのは、平民の悦ぶところ無くして、士族の抵抗も招くことになるからである。

しかして天下の人民をしてすべて士と爲した以上、「士道」でもつて國民を教化し、「義氣」を涵養せしめよ、と彼は言う。その主張は、衣服・礼儀・言語・冠婚葬祭・学校教育等をすべて軍隊式に統一し、「家必銃砲兵器ヲ貯ヘテ之ヲ春秋ノ獵ニ試ミ、伍保長アリ、以テ將校ニ属ス、丁壯ヲ挾テ常備トシ、老少悉ク予備ニ充ツ」という徹底したもので、まさに臨戦態勢である。

明治元年に新政府に建白した「富国策」では、銃砲でもって外国と争うことは「不仁ノ術」であると断じ、勤倭によつて富国を図り、「推譲」の徳を外国に推し及ばし、諸外国を天子の仁徳の下に統治することにより、日本の独立と世界の平和を保つという構想を披歴している。それに比べこの段階では、出で「夫レ兵ハ凶器、戦ハ危道、固ヨリ喜フモノニ非ル也、雖然国派ヲ維持シ独立ノ權ヲ立ルモノ、何ソ兵力ニ拠ラサルヲ得ン」と言明しているように、国家独立のためには兵力に拠るもやむなし、という見解に変化している。この変化は征韓論に触発されたようである。

彼は、「慰諭百端彼レ頑トノ不省、益ス不敬ヲ重ヌ」韓を征討すべし、と主張する。そして、「頃日新ニ聞、政府黒田陸軍中将ニ命ノ、特命全權弁理大臣トノ鎮兵ヲ帥ヒテ之ヲ朝鮮ニ遣ル、使命如何知ルヘカラスト雖モ、彼ノ君臣ノ罪遂ニ免ルヘカラサルモノ、蓋シ遠キニ非ル也、皇国ノ臣民領ヲ延テ其捷聞ヲ俟」と記している。これは、江華島事件談判のため、黒田清隆が特命全權弁理大臣として朝鮮に派遣されたことを指していることは明白である。しかるに、この派遣が決定されたのは明治八年二月九日であり、「建言」の日付は同年六月一六日である。してみると、「建言」の日付は起草し始めた日であり、この部分はそれ以後に草されたことがわかる。

右の如く、彼は征韓を肯定した上で、征韓の義務は独り兵のみに委すべきではない、兵を派遣しても「糧食の虞」なきよう、理財に努め富国を図らねば、大業を成就できない、と主張する。明治元年の「富国策」では、富国によつて生じた余剰は外国にも「推譲」すべしと主張していたのが、ここでは、対外征討を支える条件として富国の必要性を説いているのである。

だが、報徳主義の根本理念である「安民」を放棄しているわけではない。「国用ヲ足シ、人民ヲ殷富ナラシムル」ことこそが富国の基礎であることを、ここでも強調している。良一郎の思想は、国家の「富国強兵」路線への順応を示しつつも、基本において、国民生活犠牲の上に富国強兵を図る国家の政策とは対立する面を有していることを、看

過してはならない。事実、以後、地租改正、松方デフレを通じて両者の矛盾は次第に顕在化してゆき、彼は国家の行財政政策に対する批判を活発に展開している。この点は、報徳運動を国家の政策・イデオロギーとの関係において考察していく上で、留意するべきである。

ところで彼は、理財の方法は「^(飲)歛ヲ厚フセシメ府庫充テ、税ヲ増サスノ国用足ル」ものでなくてはならないとして、ここでもやはり儉と勤を根本に置いて、その方策を建議している。そして最後に、神州は外域から資本を借りたり、外来の器械を用いたりして開かれたのではなく、「天祖」自ら農器を製し、田地を次々と開墾していったことにより開闢したのだ、という二宮尊徳の言を引用し、この方法（「勤儉」）を踏襲することによって、自力で富国を図るべきことを説いている。こうした神州開闢説が、尊徳の農村復興事業、良一郎の殖産興業事業を精神的に支えていたのである。報徳主義を貫く皇道思想も、そこに根拠が置かれているのであり、「富国安民」を目指した実践活動は「天祖の徳」に報いることだと説かれる所以である。

例では、現実の政府の理財の方法は、「上ニ益スニ非スノ大ニ下ニ損セル」ものであり、「苟モ之ヲ舍テ拯ハスンハ、三年ヲ不俟ン天下ノ農民溝壑ニ転ン死セン」と批判を加えている。殊に「田租金納ノ法」を改めることは「焦眉ノ急」である、と言う。その理由として、第一に、農民が穀を売って金納することを余儀なくされると、商人に足下を見られて買い叩かれ、その損耗を補うため高利貸に頼らざるを得なくなること、第二に、一時に貢租を金納すれば、民間の貨幣流通を逼塞させること、を挙げている。

そして、代案として次の如き黄稻銭貸付の法を建議している。三月を貢金皆納の期とし、一月より三月まで月ごとにその一〇分の一ずつを納めさせ、残り七分は黄稻銭を貸して納めさせる。代わりに米を質に取って郷倉に置き、戸長が管理する。その元金を七分し、四月より一〇月まで月ごとに若干利子を付けて納めさせ、そのつど質穀を返付す。

以上がその内容であるが、さすれば、「農金ニ苦マスノ商穀ニ俟ツコトアリ、穀価其平ヲ得テ民其利ヲ不失、之ヲ収ムルニ月次ヲ以テシ、之に益スニ息ヲ以テシ、之ヲ出スニ月次ヲ以テシ、金幣空シク府庫ニ淹ラサレハ、官其利ヲ得、官民其利ヲ得テ天下富強」である、と自賛している。

表紙

一

敬 齋 議 草

『

⑧明治五年「対問」

対問

三条ノ旨至レリ矣、而ノ其人心ヲ感発スルハ敬神ヨリ善キハナシ、人心一タヒ感発ノ三条ノ旨得テ可説也、蓋シ教ノ不可止也久シ、而ノ教之其道ヲ得ルモノハ盛ニ行レ、其道ヲ不得モノハ輒チ廃ス、仏氏ハ寂滅ヲ以テ其道ヲ得タルモノ也、邪蘇ハ福音ヲ以テ其道ヲ得タルモノ也、孔子ハ易ヲ以テ其道ヲ神ニス、凡ソ人心ハ畏怖スル処ヨリ興リ、憂思スル処ヨリ入リ、福祿ヲ受ルヨリ勉ム、之ヲ顧ミルニ畏怖スル処ナシ、之ヲ慮フニ憂患スル処ナシ、之ヲ守ルニ福祿ノ至ルナケレハ何ヲ以テカ道ニ勸マン、王者政ヲ為シ教ヲ布ク、其機焉ニ在ルカ、善者ハ賞シ不善者ハ罰ス、神ヲ敬スルハ善ヨリ大ナルハナシ、神ヲ誣ルハ不善ヨリ大ナルハナシ、善ハ国ヲ愛スルヨリ大ナルハナシ、不善国ヲ亡ミスルヨリ大ナルハナシ、天理人道ヲ明ニスルハ善ノ事ナリ、皇上奉戴 朝旨遵守ハ善ノ驗也、鰥寡ヲ恤ミ小恵ヲ行フ、

亦是即チ敬神ノ道ノミ、夫レ神ハ声ト形ト無フン昼夜ノ守其身ヲ不離、豈敢テ敬セサルヘケンヤ、雖然神ノ神タルヲ説ハ人ニ在リ、苟モ其人ヲ不得ハ、則彼人亦唯腥僧ノ説法、街上ノ戲談ト何ゾ別タン、嗚乎我カ 神州赫々タル神威、孩提ノ童モ其敬セサルヘカラサルヲ知ル、苟モ善ク是ノ良智ヲ誘テ人道ヲ明ニスルコトアラハ、誰カ敢テ 朝旨ニ戾ルモノ有ンヤ

右、明治五年浜松県教導職幹事近重八潮彦殿ヨリ尋問ニツキ、即之ニ對フ

⑨明治六年五月二日「建下院之建議」

建下院之建議

民ヲ自由ヲ得セシムルモノ君民同治ヨリ善キハナシ、君民同治ハ宜シク下院ノ設有ルヘシ、文明ノ治獨リ未タ斯拳ニ不及モノハ、政府ノ深意知ルヘカラスト雖モ、吾以為、決ノ猶予スヘキノ理ナシ、夫レ君主專治ノ弊タルヤ、民權ヲ抑制ノ下モ情ヲ陳ル不能、情陳ル不能ハ民悶々、上下情ヲ異ニシ事乖離ス、外患之ニ乗ン人傍觀ス、曰ク、国ハ乃チ天子ノ国タリ、其興亡ハ專ラ政府ニ關スレハ、國民ノ与ル所ニ非スト、国ニ災害アリ、人々其一分ヲ被ルノ心ナケレハ、政府ノ不亡モノ幾希也、且天下國民ヲ人々其災害一分ヲ被ラシムヘキモノハ、幸福モ亦与ニスヘキニアリ、国必天下ト与ニ守リ、事必天下ト与ニ議ス、天下ノ民ヲ天下ヲ憂フルノ心ヲ存セシム、天下ノ民各其心ヲ存ン国興ラサルモノ幾希也、或曰、人民ノ智識未タ開ケス、是時ニ当テ之ヲ施ス事、梗塞多ク、恐クハ進歩ノ碍ヲ為スノ憂アラシ、答曰、不然、天下開化ノ遅々タルユエンハ、政府獨リ開化ノ善ヲ知テ國民与リ知ラサレハ也、且天下億万人ヲ治ム僅カニ政府數百人ノ心ヲ以テス、民焉ソ自由ノ權アルヲ得ン、^(辭)避險辺民頑乎トン古株ヲ守ル、開化ヲ妨ル却テ大ナルヘシ、下院ノ設豈猶予スヘケンヤ、是吾カ企望止マサルユエン也、雖然唯恐クハ政府勢猶下院ヲ抑制ノ終ニ其

権ヲ舒ル能ハサラシムルトキハ、其設ケモ亦一介ノ長物ニ属ノ年ヲ不俟ノ廢額ヲ致サントス、依テ予メ下院ノ權制ヲ議ノ列款スル、如左

第一条

正院政ヲ舉ントス、必之ヲ下院ニ議ス、下院同議多キニ從テ之ヲ施行ス

第二条

正院事ヲ施ス、下院ニ不議モノハ、下院之ヲ拒ムノ權アルヘシ

第三条

天下人民共ニ天下ヲ保ツノ心アルヘシ、下院ノ議員ハ天下ノ代理ナレハ、尤其心ヲ失フヘカラス、苟モ其義ヲ誤ルモノハ、速ニ之ヲ改選ス

第四条

下院固陋ノ識ヲ看破ノ新面目ヲ着ルヲ要ス、雖然正院モ亦之ヲ強ルヲ不得

第五条

政府ノ歳入・歳出、諸省ノ消費詳カニ下院ニ示スヘシ

第六条

下院ノ定員二万戸ニノ一人ヲ出スヘシ、全国七百万戸ニノ三百五十人トス

第七条

議員ノ年限ハ一年ニノ交代スヘシ

第八条

下院ノ議員ハ官禄ヲ食ムヲ不得

第九条

府県モ亦議院ヲ置ヘシ

右設立ノ法、其精良ニ至テハ君子宜シク外国ノ法ヲ斟酌ノ条款ヲ定ムヘシ、吾レ唯其挙ノ速カニ斯ニ及ンコトヲ欲シ、聊カ蛇足ノ建議ニ及フモノ也

明治六年五月二日於東京支庁稿之

⑩明治六年四月二三日「官ニ任スルノ議」

官ニ任スルノ議

官不任ハ則チ職掌ラス、任スレハ則各県其治ヲ異ニス、是レ政府ノ憂フル処ニシテ會議ノ由テ起ル所以也、雖然官ノ有徳ヲ挾フユエンハ、其任ニタクユルヲ欲ノ也、瑣々ノ事務掌テ以テ政府ノ指令ヲ俟トキハ、有徳ヲ用ユルコトヲセスノ可也、既ニ有徳ヲ掌テ之ニ任スル不能ハ、則百事不舒、政府以テ其不舒ヲ責レハ、則非也、夫レ事任スレハ、人其才ヲ尽ス、既ニ其才ヲ尽ノ其事不掌ハ、其人任スルニ不足也、故ニ政府ノ県官ニ於ル大綱ヲ執テ細目ヲ委ス、要領ヲ總テ委、条ヲ不問、何ヲカ大綱ト云、人民保護条令・布告・租税・賦役・賞罰・兵備・外国關係ノ事務也、何ヲカ要領ト云、民ヲ治ムル仁ヲ以テスルカ、税ヲ歛^(斂)ムル厚キヲ貴フカ、民ノ風俗文華ナラシムヘキカ、学ヲ起ス智識ヲ貴フカ、夫治仁ヲ欲スレハ、事皆仁ニ出スヘシ、税厚キヲ欲スルトキハ、定額ニ比シテ漸ヲ以テ増加スヘシ、風俗華ヲ貴フトキハ、之ヲ率ユルニ文ヲ以テス、学智識ヲ貴フトキハ、見聞ノ師ヲ掌ク、一ニ政府ノ欲スル処ニ從テ之ヲ左右ス、政府

吏ヲノ巡察セシメ其挙・不挙ヲ監督シ、歲次会同以テ其治ヲ演ヘ、其当否ヲ論シ、其趣ヲ殊ニスルモノハ、其可ニ從テ之ヲ改ム、政府手ヲ拱ン海内ノ治ヲ制ス、其法易簡ニシテ吏能ク其力ヲ尽スヘシ、雖然其制度ニ至テハ、政府議ノ県ニ布ク、県官受テ之ヲ施行ス、其細ヲ不責ノ、其大ヲ責ム、有徳任ニ當テ官ニ報ユルニ足ル、海内ヲ治ル所以也

明治六年四月二十三日稿

①明治六年四月二十四日「府県日誌ヲ發スノ議」

府県日誌ヲ發スノ議

政府既ニ治ヲ府県ニ任ノ天下其揆ヲ同フセント欲ス、歲次会同以テ其得失ヲ論スト雖モ、既ニ施ノ而後其失ヲ改メ其得ニ從フトキハ、則民其命ニ苦ミ、官亦不治、之ヲ挙テ政府ノ指令ヲ俟ツトキハ、其職舒ル不能、然レハ則、之ニ任スルモ未タ必シモ可トセス、任セサルモ亦必シモ可トセス、任・不任ノ際、張弛緩急其レ豈一朝ニ論スヘケンヤ、雖然之ニ任スルモ人ニ在リ、任セサルモ亦人ニ在リ、既ニ其人有テ而其官ニ任スレハ、則豈復其細ヲ問ンヤ、既ニ其細ヲ問ハサレハ、各県自ラ治ヲ異ニスルノ憂ナキコトヲ不保セ、如何ノ其弊ヲ防カン、曰、府県ノ日誌ヲ發スヘシ、各府県細大ノ事務、之ヲ施スノ日ヲ以テ即チ登梓シ、政府ニ達シ、府県ニ領ツ、販売ヲユルノ民ニ偽リナキヲ示シ、亦広ク其得失ヲ覩ル、夫レ大綱ヲ陳ルト雖モ細目齊シカラサルモノハ、旨趣ヲ解スル不同ヲ以テ也、今府県日誌ヲ發シテ相報知シ、天下ノ公許ヲ得、先ツレハ、則天下ノ則タリ、後レハ、則天下ノ制タリ、於是カ府県ノ事務弊害ナキニ庶幾ランム、史官其録ヲ掌リ、董狐ノ筆之ニ當ル

明治六年四月二十四日稿

⑫「明治六年」「停奢侈行勤儉建議」

停奢侈行勤儉建議

伏ノ惟フ、方今天下ノ俗文明開化進歩駁々、雖然事或ハ奢侈ニモ属スル有リ、事或ハ私利ニ属スル有リ、是亦開化ノ一病、恐ハ生財富國ノ道ニアラサル也、夫レ百万ノ家破産手ヲ翻スノ中ニ在リ、千金ノ家能ク数百年ノ久シキヲ保ツモノハ、其分ノ守ト失トニヨル故ニ、其分ヲ守ルモノハ永カルヘク、其分ヲ守ラサルモノハ永カラス、興産モ亦然リ、其守ルモノハ久シキヲ俟、其守ラサルモノハ其産ヲ突起ス、雖然突起ノ産ハ必シモ國家ノ財ヲ生スルモノニアラス、人ノ損失ヲ網羅ノ己レノ産ヲ起スモノ也、久フン後富ムモノハ自ラ勤儉ノ財ヲ生スル也、人ヲ網羅スルニアラサル也、雖然勤儉ノ難行、文人却テ之ヲ野視ス、智ヲ回ラシオヲ馳テ天下ノ人ヲ網羅セント欲ス、假令一朝百万ノ産ヲ突起スルモ、是豈天下ノ財ヲ生スルトセンヤ、彼レニ取テ之ニ増ス、天下終ニ利ヲ競フ、愚者ノ肉智者ノ食、夫レ政ノ貴フ所ハ、智愚賢不肖齊シク其保護ヲ被ルニ在リ、生財ノ道偏ク施ノ広ク行フヘカラス、何ヲカ生財ノ道ト云、勤儉是也、力作荷担ハ愚者ノ勤也、奇功興利ハ智者ノ勤也、^巧応命使役ハ不肖者ノ勤也、当路濟世ハ賢者ノ勤也、分ニ從テ財用ノ度ヲ節制スルハ上一般ノ儉也、夫レ上儉ヲ貴フ時ハ財用足ル、下儉ヲ貴フ時ハ國不^巧乏、賢智者儉ヲ貴フ時ハ愚不肖者不^巧修、奇巧以テ國益ヲ起スヘシ、贅沢奢侈ノ器物ヲ不^巧製、衣服制有リ、以テ上下ノ分ヲ為ス、勤儉ノ生スル所ノ財ハ人ヲ網羅スルニ非ル也、勤儉其レ生財ノ原乎、請フ、天下ヲ勤儉ナラシムルノ策ヲ建シ、銀鎖ノ時計、勅任ニ非レハ挂ルヲ不^巧許、羅紗ノ被、奏任ニ非レハ覆フヲ不^巧許、庶人モ亦等ヲ定メテ絹布ヲ禁シ、銀鈿、甲叉人ヲ^巧其奢侈ヲ縦マ、ナラサラス、商戸ニ命^巧ノ玩弄ヲ禁クヲ禁ジ、工戸ニ命^巧ノ贅器ヲ造ルヲ停メ、凡一物國ニ益有ルヲ製造スルモノアレハ、之ヲ賞^巧ノ專売ヲ許シ、一物奢靡ニ属スルハ嚴誡ヲ下ス、節用ノ道ヲ立テ天下ノ民ヲ^巧遵守

セシム、外国ニ誇ルニ勤儉ヲ以テノ修驪ヲ以テセス、天下国家生財ノ道、夫レ之ヲ舎テ復何ノ求ル所アラシヤ、嚮キニ某ノ氏ノ建議ヲ閱ルニ、天下国用ノ不足ヲ補フ、大ニ外国ノ金ヲ借りテ利益ヲ興サント欲ス、之ヲ小家ノ借債ヲ治ムルニ譬フ、鄙見ノ甚シキ、天下ヲ以テ一山奸商ニ倣ワント欲スルカ、君子苟モ利ヲ務テ修摩ヲ防クナクンバ、兆民必其途ヲ誤、卓犖不羈生財ヲ不勤ノ網羅ヲ勤ムルコトアラントス、譬メサルヘケンヤ、尊嚴ヲ冒ノ敢テ拙陋ノ議ヲ建、僭越ノ罪固ニ追ル、処ナシ、誠惶謹言

⑬〔明治六年〕「教学之議」

教学之議

教学不可欠也久シ、而ノ教ト学ト一ナラス、教ハ則チ衆ヲ化スヘシ、学ハ則チ智ヲ開クヘシ、雖然教学相兼ルニ非レハ、以テ教師トナスニ足ラサルナリ、教トハ何ゾ、天下ノ智愚孳テ以テ其教ヲ奉セシム、学トハ何ゾ、修身齊家治國平天下ノ事ヨリノ天地事物ノ理ニ至ル推窮、以テ人世ニ用タラシム、然リ而ノ教学ノ任誰カ夫レ之ニ当ル、僧侶ヲ用シカ、曰、不可ナリ、彼レ自カラ其宗アリ、洋学ヲ用シカ、曰、不可也、彼レ専ラ彼ヲ是トス、儒ヲ用ヒシカ、曰、不可ナリ、彼レ唯経伝訓詁ニ泥ス、曰、然ラバ則チ何ヲカ用ヒン、曰、教学ハ祠官ノ專任タルヘシ、僧侶ノ可用ハ祠官トナスヘシ、儒ノ可用ハ祠官トナスヘシ、洋学ノ可用ハ祠官トナスヘシ、彼レ既ニ祠官タレハ、神ニ事ルノ心ヲ以テ教ヲシク、仏者ト雖モ仏ヲ説クコトヲ不得、洋学ト雖モ邪蘇ヲ説クコトヲ得ス、儒ト雖モ専ラ堯舜ヲ説クコトヲ得ス、都テ敬神愛國ノ教ニ服ン、而我カ神州ノ道始テ復焉ニ立ツ、抑教法ノ仏ニ帰シ、文学ノ儒ニ帰シ、神官ノ虚器ヲ擁スル久シ、之ニ加ワルニ洋学ヲ以テス、神道殆ント將ニ絶^(絶カ)ントス、当此時朝廷万世超過ノ議ヲ以テ敬神愛國ノ教ヲ建ツ、異端曲学ノ徒日ヲ追テ潜伏ス、勢落水ノ如シト雖モ、勢モ亦人ニ因リテ利ス、且学制ニ依テ学区ヲ定ム、資本ノ

憂喋々復説コトヲ不用、今祠官ヲ以テ教師トスレハ、則チ教学相兼、衆庶ノ帰向、学資ノ起易簡ニ其行ル、ヤ甚速カナルヘシ、他日仏寺ノ衰ル、葬祭都テ祠官ニ帰シ、一教確立、必彼ノ西洋諸州ノ邪蘇ニ於ルカ如クナルヘシ、曰、方今其人ナシ、曰、其方ヲ施シ其人ヲ待ツ、其至ル遠カラス、若儒ハ儒タリ、仏ハ仏タリ、八宗各其趣ヲ異ニスルハ、暫ク置テ問フヘカラスト雖モ、祠官ハ自カラ祠官タリ、学区ハ自カラ学区タラハ、黎民其資ニ苦シミ、苦情紛々止ムヘカラサラントス、教学相兼ルノ易簡ナルニ如カサルナリ

⑭明治六年五月「勤儉論」

勤儉論

天下ヲ大ニ為スコト有ラシムルモノハ、大ニ為スコト有ルニ足ルノ法ヲ以テス、乃チ天下斉シク遵守シテ乖戾スヘカラス、乖戾スレハ、則有罰、生財ノ道依テ偏^(通)ク施シノ広ク之ヲ行ハシムヘシ、何ヲカ生財ノ道ト云、勤儉是也、力作荷担ハ愚者ノ勤也、奇巧興利ハ智者ノ勤也、応命使役ハ不肖者ノ勤也、当路濟世ハ賢者ノ勤也、分ニ従テ財用ノ度ヲ節制スルハ上下一般ノ儉也、夫レ上儉ヲ貴フ時ハ財用足ル、下儉ヲ貴フ時ハ国不^(通)乏、賢智者儉ヲ貴フトキハ愚不肖者不^(通)侈、法ハ即チ天下共ニ之ヲ守テ妨碍ナキモノニ、政府ト富民ト智者ト奇巧者ノミ独リ其幸福ヲ受ルニアラス、人民ト貧者ト愚者ト拙夫ト与ニ其幸福ヲ共ニスヘキ也、雖然人或ハ人ヲ束縛スルノ毀リヲナスヘキモ、乃チ人ヲ自由ニ其志ヲ實^(通)ヘ振作有為セシムル法ニ、苟モ之レナキ時ハ、天下益マス財用ヲ務メテ益マス不足ヲ生シ、盛ンナラント欲^(通)ク漸ク衰替ヲ致スヘシ、或ハ一朝ニノ百万ノ産ヲ起スアルモ、天下ノ財ヲ生スルニ非ス、彼レニ取テ之ニ益スモノ、ミ、而^(通)儉ノ国ニ益アル、上天子ヨリ下褻^(通)ニ至ル迄得テ行フヘシ、天下三千五百万ノ人年ニ金一錢ヲ贏ストキハ三十五万^(通)円タリ、一円ヲ儉スレハ三千五百万円タリ、儉奢ノ間固ニ数量ノ限ル所ニ非ス、邦広キヲ加ヘスン広ク

財多キヲ不加ノ優、天下ノ人富ヲ欲セサルナシ、富ヲ欲スルモノハ必自カラ儉ヲ欲ス人情然リ、而世態文華ヲ貴ヒ質朴ヲ賤ムノ惡弊有ルヲ以テ、人々相競テ外飾シ、内チ実ニ其分ニ溢ル、有リ、於是別ニ利益ヲ起スノ策ヲ建テ、人ノ財宝ヲ網羅セント欲ス、内虚ニノ事ヲ起、不斃モノ幾希也、夫レ天下ノ人自カラ儉ヲ欲セサルハナシ、齊シク欲スル処ニノ等シク行フ不能モノハ、世態ノ惡弊ニヨル、惡弊何ニ依テ起ル、耳目ノ欲ヲ放マ、ニセシムレハ也、誰カ夫レ之ヲ放マ、ニセシム、其責豈婦スル処ナカランヤ、夫政府儉ヲ貴ヘハ国用足ル、器械ヲ製シ、土地ヲ拓テ物産ヲ増殖ス、航海ヲ務メ貿易ヲ隆ニノハ荒ヲ驅馳ス、国民皆儉ヲ勤メテ余財ヲ生ス、余財ノ才国益ヲ興ス、贅沢奢侈ノ器物ヲ不製、衣服有制、金銀有禁、惡弊ヲ改メ風俗ヲ正シフ、天下ノ民ヲ大ニ開化ナラシムヘシ、抑我カ国俗自カラ窮理經驗ヲ為ス不能ノ喜テ人ノ跡ヲ襲フ、人既ニ其奇巧ヲ施ノ国ニ及シ、其利ヲ得、我只其余瀝ヲ管テ之ヲ利トス、其然ルユエンハ何ソヤ、国民貧ニ安ノ智力ヲ回ラスノ暇日ナキヲ以テ也、国民ノ貧ナル何ニ依テ起ル、上下奢侈ヲ貴ヒ樸質ヲ賤ムノ惡弊有ルヲ以テ也、夫レ既ニ上下儉ヲ行テ余財有リ、国民ヲ鼓舞シ智力ヲ回ラシ奇巧ヲ起ノ人ニ先ツ、我常ニ其利ヲ得テ、人ヲノ常ニ余瀝ヲ挹マシムレハ、則天下國家ノ利茲ニ於テカ在リ、国民ノ富ハ政府ノ富ムユエンナレハ、称ノ天下ノ富ト云コトヲ得ヘシ、政府ノ富ハ国民ノ貧ナルユエンナレハ、称ノ天下ノ富ト云コトヲ不得、人ハ云ヘ、貿易ヲ盛ンシテ其利ヲ得ント、吾ハ云、勤以テ物産ヲ起サン、人ハ云ヘ、器械ヲ以テ利ヲ起ス、吾ハ云、儉以テ器械ヲ製セン、人ハ云ヘ、学以テ自ラ儉ヲ知ラシメン、吾ハ云、法以テ儉ナラシメ、儉以テ学ヲ起シ、学以テ其然ルユエンヲ知ラシメン、勤儉ノ言タル陳府ニ属スルカ如シト雖トモ、天地無窮万世ノ後ニ至リ、國家此ノ二者ヲ欠クトキハ、其滅亡必之ヲ掌ニ視ルカ如キモノ也、豈大敝儉法ヲ立テ、天下ヲ遵守セシメサルヲ得ンヤ、君子以為、如何

明治六年五月投報知新聞

右、立下院以下数篇、於東京支庁草之

⑮〔明治六年〕「剝三浦氏之濫惠」

剝三浦氏之濫惠

東京日々新聞四百三十一号ヲ閱スルニ、入水ノ婦ヲ助ケシ話アリ、三浦氏ノ援ニ因テ蘇生セルハ、真ニ天幸ノ婦人ト云ヘシ、宜ナリ、速ニ同氏ニ如テ其恩ヲ謝スルヤ、而ソ三浦氏蘇生ノ喜トテ金二十円ヲ惠メルハ、吾レ未タ何之義タルヲ不知、彼レ親戚旧故ノ因アルニアラサル也、貞操節義ノ人ヲ感スル有ルニ非ル也、貧窶寄食スル処ナキニアラサル也、当日彼ノ命賊手ニ罹リ生死厶ニ一呼吸ヲ隔ツノミ、是時ニ当テ苟モ死ヲ免ルコトヲ得ハ、其賸既ニ己ニ無比、亦豈何ノ名アリテ別ニ金ヲ与フルコトヲ為ンヤ、凡ソ賞ノ貴フ処ハ、以テ節義廉恥ヲ勸ムルニ在リ、惠ノ貴フ処ハ、貧ヲ賑ワシ業ヲ励マスニ在リ、而ソ其時処ヲ不得ハ、二者モ亦可トセス、況ヤ彼ノ婦ニ於ルヲヤ、孟子不言ヤ、以テ可与、以テ与フヘカラスノ与フレハ、惠ヲ傷フ、三浦氏ノ如キハ、恐クハ婦人ノ容姿ニ眷戀スル処アリテ惠ヲ傷フモノナラン、婦人感銘、其レ遂ニ何ヲ以テ之ニ報ヒテ可ナランヤ

⑯〔明治六年八月〜同七年四月〕「草木耕種法ヲ刊行スルヲ請ノ建議」

草木耕種法ヲ刊行スルヲ請ノ建議

草木耕種法二十卷・培養録二卷・土性弁一卷ハ、羽州秋田ノ隠士佐藤信淵ノ著ス処ニシテ、草木樹芸百穀稼穡培養ノ法頗ル精微確實ナリ、蓋其人博聞強識、倭漢ヲ該テ、洋学ニ通シ、究理經驗至ラサルナシ、其著書極メテ多ク、皆以テ国家有用ノ書タリト聞ク、雖然其上梓スルモノ稀ナルヲ以テ、未タ之ヲ見ルニ不及、臣カ家藏會テ深ク農事ニ心ヲ用

ヒ、広ク農書ヲ需メ、幸ニ此書ヲ得一閱、欣然瞻写ノ家ニ藏ス、之ヲ實際ニ試ルニ其効ヲ得ル頗ル多シ、信ニ識ル、
信淵ノ學席上窮理ノ論ニアラスノ、親ラ經驗スル処ナルヲ、家嚴因テ之ヲ珍藏シ、同学ノ社中ニ指示シ其法ヲ行ハシ
ム、稻粱菽麦栽茶ノ法等其寶ヲ受ルモノ鮮シトセサル也、苟モ之ヲ以テ広ク天下ニ公ニス、其益タル必亦少々ニアサ
ラルヘシ、蓋シ物産ヲ盛ニスルハ、徒ニ山川ヲ平ニシ原野ヲ開拓スルヲ以テ専務トスヘカラス、其耕種培養ノ法ヲ疎
ニスレハ、良田變シテ薄地トナル、況ヤ新墾磽薄ノ地ヲヤ、其法ヲ精窮スレハ、磽确ノ地ト雖モ能ク百物ヲ生育スヘ
シ、況ンヤ良田ヲヤ、故ニ物産ヲ盛スルハ、専ラ彼ニアラスシテ之ニ在ルコト知ルヘキ也、今一反ノ田アリ、尋常ノ
人或ハ米四俵ヲ得ヘシ、若シ之ニ培養ノ術ヲ加ヘテ五俵ニ得ハ、則二畝十五歩ノ地ヲ開拓スルニ齊シ、若シ一反ノ茶
園アリ、尋常十円金ヲ得ヘシ、之ニ培養ノ術ヲ加ヘ精製ノ十五円ヲ得ハ、五畝歩ノ地ヲ開拓スルニ同シ、地広キヲ不
加ノ広ク戸口多キヲ加ヘテ、各其業ヲ為スニ足ルヘシ、今天下ノ士族婦孺スヘキ地ナシト云ハ、農業ノ粗ナルニヨ
ル、農業粗ナルカ故ニ、一夫能ク數項ノ田ヲ耕スヘシ、一夫數項ノ田ヲ耕ス故ニ、培養精ナルヲ不得、民乃チ以テ常
トス、夫レ培養精ヲ尽セハ、數項ノ田一夫ノ得テ耕スヲ得ヘキ処ニアラス、既ニ耕ス処余リアレハ、人口増サ、ルヲ
得ス、故ニ農業精ナレハ戸口増ス、耕ス処狭ノ産ヲ得ル多ナリ、農業粗ナレハ戸口減ス、耕ス処広フノ産ヲ得ル少、
是レ人煙ノ盛衰スルユエン也、然レハ則耕種培養ノ術豈粗ニスルヲ得ンヤ、此頃新聞紙ヲ閱スルニ、鏡湖花陰氏盛ニ
信淵ノ書ヲ稱シ國家必用ノ書トナス、樞少屬八木正路モ亦之ニ繼テ其美ヲ唱フ、因テ臣力家其書ヲ藏スルヲ正路ニ語
リ、正路大ニ歎フ、既ニ大藏省某官織田完之氏書ヲ正路ニ贈リ、以テ上梓セント欲スルヲ言フ、臣モ亦欣然共ニ与
ニ力ヲ戮セテ事ヲ舉ント欲ス、雖然臣等疲力、能其資ヲ弁スル不能、此頃幸ヒニ資産金ノ方法立ツ、臣其事ニ与ルヲ
得、伏ノ願クハ、許可ヲ得テ之ヲ社員ニ議シ、暫ク其金ヲ以テ資本トナシ、上梓ノ以テ 管下ニ頒チ、且ツ以テ天下
ニ公ニセハ、庶クハ、文明ノ 聖世人民開智物産蕃殖ノ一助タルコトヲ得ン、懇願ノ至ニ堪ユルナシ、誠恐誠懼頓首

謹言

權少屬岡田良一郎

⑭明治七年四月「奉送石黒某郎君航于米州序」

奉送石黒某郎君航于米州序

富岳之於神州一瞰、則四海大洋入吾眼界、而群峰凸凹百川經絡茫乎坦然矣、君子志道高尚其學、則彼百家衆技之流与惑世誣民、充塞仁義者、蕩然可一掃也耳、我浜松県參事石黒明公使郎君航海、學於米州者、蓋有取焉郎君勉乎哉、夫測星宿論風雨說山海講魚鳥窮物理、起奇巧御大空駭茫洋不足、以為學也、依頼鬼神喜榮光現妖怪、誠淫惡不足、以為教也、君臣無義父子無恩男女同權不可、以為道也、然則何取乎、其學曰政体、曰兵法、政則所以御下也、兵則正所以征邪也、兵政也者、夫米國之所以共和富強矣歟、居則可以為、相出則可以為、將使彼群物百端舞蹈乎、我囿中洋々然不知憊焉、蓋可為學之、尤高尚者也矣、雖然政以國殊兵以時變、苟得其心以彼施之、則無所不通也、郎君時歲十三穎語駿邁、承公之命、欣然慨繼、巨突吐煙火輪轟々雄視、一世之機夫発于斯歟、依祝之饒其行

明治七年春四月於浜松官舎

⑮明治八年五月一三日「勸業ニ付建言」(仮題)

少屬某言ス、勸業ノ事タル忽ニス可カラズ、忽ニスレバ、則チ民荒ム、其法タル悉サ、ル可カラズ、悉サ、レバ、則チ民志齟ス、急務善法ト謂フト雖トモ、或ハ亦梗塞ヲ生スベシ、梗塞生ズレバ、則チ法行レズ、然リ而シテ某以テ憂トセザルモノアリ、是其法ノ応ニ熟シ、其事ノ遂ニ行ハル、ニ近カラントスルヲ以テ也、衰ヘテ復盛ナルハ元氣ノ存

スルニ因ル、廢シテ復興ルハ其法ノ廢ス可カラザルヲ以テ也、且法ノ設クル、固ヨリ民ノ權利ヲ得セシムルニ期ス、民ヲ率ヒテ權利ノ域ニ至ラシムルハ、蓋シ地方ニ官タルノ務メニシテ、何ゾ之ヲ拘束ト云ハシ、苟モ此務ヲ廢シ、人民各自其私ヲ縦マ、ニセシムルヲ以テ自由トセバ、何ゾ又政ヲ為ヲ用ヒシ、当県ニ於テ設立セラル、製茶改所ノ事タル、規則既ニ消却、勢土崩瓦解ニ付ス、是其法果シテ不可ナルアリテ然ル歟、果シテ国民ノ害アルヲ以テ然ル歟、二者皆然ラザルナリ、特ニ未ダ少ク人智ノ未開ニ適セサルアル歟、將タ商会ノ如キハ人民ノ相對ニ任ス可キヲ以テ然ル歟、深慮未ダ測ル可カラサル也、然リト雖トモ、某窃ニ以為ク、政ハ則チ國ノ為ニスルモノニシテ私ノ為ニスルモノニ非ズ、法善ナラバ、與人ノ誦何ヲカ嫌ハン、法不善ナラバ、千万人媚言諛賞ヲ獻スト雖トモ、復何ヲカ用ヒシ、政ヲ行フ必ズ天下万類挙テ悅ブヲ俟タバ、百代ノ後ト雖トモ、決シテ旧弊ヲ洗除スルヲ得可カラザル也、物皆弊アリ、製茶独リ豈弊ナカラン、其弊ニ居レバ、則チ弊ヲ知ラズ、木屑人ノ目ニ在ルヲ視ル、梁木己ノ目ニ在ヲ視ル能ハサルガ如シ、鍋ニ煎リ日ニ乾カシテ炭火ヲ偷ム、是從前ノ惡弊タリ、製造ノ功拙ハ天与ニ非ズ、拙手ヲシテ巧手タラシメント欲スレバ、拙手ノ不自由ト雖トモ、之ヲシテ良師ニ就テ學習セシメサル可カラズ、惡製ヲ禁スレバ、旧弊者ノ不自由ト雖トモ、國產ノ名義ヲ立ント欲スレバ、之ヲ検査シテ不良ヲ誡メサルヲ得ズ、其惡弊ノ如キハ、数年前ヨリ人々既ニ自カラ改ムルモノ多シト雖トモ、愛宕ノ郷里ハ去年ニ於テ始テ止ムト云フ、惡製止ムト雖トモ、之ヲ以テ良製ト言フ可カラズ、只其惡ヲ止ル耳、大井川根ノ如キハ從來稱シテ良産トス、是レ生レナガラニシテ良ナルニ非ズ、會テ宇治ノ工人ヲ師トシテ郷中大率之ニ從フ、故ニ製造ヲ一ニセント欲スレバ、必ズ川根ノ上茶ヲ以テ範トナスベシ、然リ而シテ川根ハ自カラ良茶ヲ生シ、愛宕ハ自カラ龜茶ヲ生ストシテ恠マザルモノハ、則チ之ヲ製造人ノ旧弊ト云フ、豈菅川根ト愛宕トヲ論ゼン、一区一村比隣ニシテ精麁アリ、而シテ自カラ恠マサルモノ、亦豈之ヲ天ニ委センヤ、去年改所ノ設ル、概シテ惡弊彈ムニ近シ、今年改正ノ法立、懷乎トシテ民之ニ応ズ、人々各自カラ心ヲ良製ニ用ユル

些ナリト雖トモ、其品ノ等ヲ進ムニ於テハ、蓋シ誠ニ少ナリト云フベカラサルナリ、是レ森町村福川泉吾ノ言ニシテ、某ノ私言ニハアラサル也、本州ノ製茶其価百万円、若試ニ其格売割ヲ増セバ、益十万円タリ、精巧ノ価天ヨリ降ルニ非ズ、地ヨリ涌ニ非ズ、法ヲ設ケ業ヲ勸ム、何ゾ富国ノ道ト云ハサルヲ得ン、渋沢氏言アリ、凡ソ物産土宜ヲ以テ称スルモノ、其製作ヲ精ニセサル可カラズ、而シテ世人多ク通商ノ道ニ昧シ、徒ニ蕃殖ノ多カラザルヲ憂フ、品物狼戾、価亦随テ下ル、其管テ利タルモノ適以テ破産ヲ資ルニ足ル、蚕ト茶トノ如キ是ナリト、知言ト云ベキ也、故ニ製造既ニ其精ヲ抜ク、通商ノ利謀ラサル可カラザル也、通商ノ利如何セバ、則チ可ナラン、国力ヲ一ニシテ外商ニ敵シ、奸利ヲ去テ公利ヲ取ル耳、夫レ商法ハ猶戰陣ノ如シ、金力ノアル所概チ常ニ其利ヲ得、金力繼ガザルモノ多クハ其敗ヲ取ル、寡ヲ以テ衆ヲ撃ハ奇兵ヨリ善キハナシ、弱ヲ以テ強ヲ待ハ堅守スルニ若ハナシ、衆ヲ以テ衆ヲ撃ハ整々ノ旗ヲ用ユベシ、然リト雖モ、奇兵ノ勝ハ常ニ得ル処ニ非ズ、之ニ馴ルレバ、一勝シテ九敗之ニ繼グ、本州ノ商人横浜開港以來其轍可鑑モノ歴々数フベシ、弱ヲ以テ強ヲ待ツ、堅守スルモノハ咎ナキ耳、衆ヲ率ヒテ用ユベキモノハ、夫レ只整々ノ旗乎、攻撃縦横向フ処前ナシ、同心戮力結社シテ公利ヲ謀ルモノハ、商会ノ興ル所以也、勇力者アリト雖トモ、独進シテ功ヲ叨ルモノハ、軍法ニ於テ免サ、ル処ニアリ、今本州ノ商人其勢單弱、彈藥ヲ敵ニ仮リ各自進退、以テ其功ヲ得ント欲ス、敵右スレバ則チ左ス、敵左スレバ則チ右ス、食ム所ノ糧ハ誰ニカ取ル、皆我兵ノ糧、獲ル所ノ利ハ何レニカ取ル、皆我衆ノ財、務テ卑ク我衆ニ糶出シ、彼ノ自由仕切ノ価ヲ仰テ、其間ニ利ス、左右ニ国ヲ売ル、反覆ノ謀賊ト云ハサルヲ得ンヤ、而シテ其謀行レ其利ヲ得レバ彈藥ヲ返償スルヲ得、行ナワレサレバ償フナシ、於是乎爭訟ノ事アリ、是時ニ當テハ、此輩多クハは無産、爭訟スレトモ償フ可カラズ、横浜商人ノ炭タタルハ皆是レノミ、商法ノ正シカラザル斯ノ如シ、命旦夕ニ在リ、奚ゾ永安ヲ保セン、夫レ商ハ有無ヲ通ジ貿易ヲ便ニスルモノ也、商法正シケレバ、民其福ヲ受ク、商法正シカラザレバ、民其禍ヲ被ル、民ノ禍福ハ国ノ貧富強弱スル所以也、是

レ豈救済ノ法ナカルベケンヤ、売捌所ノ設アル、其基全ク茲ニ在リ、曰、売捌所ニ於テ売捌ヲ成ス、必此弊ナキ歟、曰、国力ヲ一ニシテ内外人ノ必需ニ応ズ、奸利ヲ去テ公利ヲ取ル、我彈藥ヲ充テ彼ニ敵シ、糧ヲ敵ニ取テ我衆ヲ養フ、何ゾ自カラ相食ヲ用ヒン、且一匱ノ茶ト雖トモ、製造人自カラ売捌所ニ輸スヲ得バ、又必シモ輸出商人ノ手ヲ仮ラズ、於是輸出商人自カラ相省察シテ、亦或ハ旧習ヲ悔悟スルニ至ラン、然リト雖トモ人心ノ不同面ノ如シ、豈一朝ニシテ其志ヲ必一ニ帰スルトスベケン、今日始メテ之カ形ヲ為ス、庶幾バ、三年ノ後必ラズ獨立シテ、本州ノ製茶ヲ海外ニ輸出スルヲ得ン、凡ソ勸業ノ術タル、商法ノ便ヲ開ヲ以テ第一トス、明治十一年以後米國ヘ直ニ引合ヲナサシムベシ等ノ如キ、実ニ政府ノ勸業ニ厚キ見ルベキナリ、苟モ本州ノ人民今日ヨリシテ心ヲ斯ニ用ヒザレハ、何レノ日ニカ能ク商法ノ弊ヲ改メ、公利ヲ興スヲ得ン、此法ノ設ル豈徒爾ナランヤ、某素管下ノ民、聊カ事理下情ニ通ズルノ名ヲ冒シ 明公ノ拔擢ヲ被リ、即チ愛國ノ志ヲ陳ント欲ス、製茶改所ノ事タル、実ニ某等ノ贊成スル処、事既ニ行ワル、ニ垂ントシテ、今日ノ如キ、抑モ亦國家ノ不幸、凡此事ニ預ルモノ痛惜歎嗟セサルナシ、然リト雖トモ、道塞レバ則チ開クベシ、法熟セザレハ、更ニ其精ヲ練ル元氣ノ存スル処、未ダ必ス再盛セズンバアラズ、某以テ憂トセザルモノハ之カ為メナリ、人民更ニ相結ンテ、此法ヲ維持セント欲スルニ至テハ、伏シテ願クバ、宜ク厚ク保存ヲ賜フベシ、某親老スルヲ以テ職ヲ辞スルト雖トモ、亦敢テ志ヲ空フスルヲ欲セザルナリ、愛國ノ至念、尊嚴ヲ冒瀆シテ敢テ微衷ヲ奉ル、誠恐謹言

明治八年五月十三日

浜松県令林厚德殿

少属岡田良一郎

⑭明治八年六月一六日「建言」

建言

草莽臣愚某誠恐惶頓首ノ言ス

皇帝陛下登極ノ初、首トシテ群臣ヲ会シ、五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ、国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ求ム、
皇道中興、実ニ今日ノ聖治ヲ為ス、天下万類光沢ヲ被ラサルナシ、然リ而シテ内治ノ事、猶当ニ振作更張スヘキトシ、
更ニ

聖誓ノ意ヲ拡充シ、茲ニ元老院ヲ設ケ、以テ立法ノ源ヲ広メ、大審院ヲ置キ、以テ審判ノ權ヲ鞏クシ、地方官ヲ召集
シ、以テ民情ヲ通シ公益ヲ図リ、衆庶ト俱ニ其慶ニ頼ント言ヲ求メテ不厭、

聖詔ノ旨、凡ソ海内有生ノ類誰カ忻悦翼戴セサルヘケンヤ、臣愚草莽、猶自カラ感發、以テ付度ニ酢ユルユエンヲ懷
フ、茲ニ制勢数策ヲ献シ、聊カ以テ賤志ヲ陳フ、識暗ク見窄フノ、固ニ大議ニ備ルニ足ラサルヲ知ル、忌諱ヲ不憚、
敢テ叨リニ卑論ヲ立、罪死ニ不容ト雖モ、献芹ノ微衷万一涓滴ヲ滄溟ニ補フヲ得ハ、幸慶何限、誠恐誠惶頓首謹言

浜松県管下第三大四小区

遠江国佐野郡倉真村

農

岡田 良一郎

明治八年六月十六日

三十五年八ヶ月

元老院御中

制勢

天下ヲノ永ク治安ナラシムルモノハ太政ノ制也、制ハ固ニ古ヨリ変ナキ不能、而ノ制ノ變易スル、必天下ノ大勢ニ因ルヘキ也、制勢ニ從ヘハ、則制シ易ク、政其制ヲ得レハ、則治安窮リナシ、何ヲカ勢ニ從フト云、天下人心ノ向フ処ニ從フ、是也、何ヲカ制ヲ得ルト云、国体ヲ不失、是也、雖然勢從フヘカラサルアリ、民權ヲ重ノ君臣ノ大義ヲ疎ニシ、文明ヲ貴テ天下侈靡ニ赴クカ如キ、是也、国体變更ナキ不能モノアリ、天下ノ治乱独リ

皇室ノ安危ニ関スル、是也、関スル処ノ至重ナル、此ノ如キハ何ソ、是レ 本朝從古天下ハ一人ノ天下ニシテ、天下ノ天下ニアラサレハ也、政府ハ即

皇室ノ政府ニシテ、天下ノ政府ニハアラサルカ如ク然リ、蓋シ前世業ヲ創メ法ヲ垂ル、固ニ此ノ如クナルヘキ也、雖然某愚竊ニ以為ク、今日ノ勢、復必シモ斯ノ如シト為ズ、政典ヲ制定ノ万世無窮ノ基ヲ開モノ、天理人道豈詳カニセサルヘケンヤ、是レ 朝廷ノ広ク万国ノ良法ヲ採リ、公議ニ決スルユエン至レリト云ヘキ也、某愚不学、焉ンソ敢テ太政ノ事ヲ議セン、貢賦ノ法ニ於テ聊臆算スル処アリ、今之ヲ參考ニ備ヘント欲ス、而ノ之ヲ論スル、先ツ

皇室・政府ノ別ヲ立、君民ノ所有ヲ定メサルヲ得ス、乞フ欽テ之ヲ陳ン、曰、

皇室ハ即チ天子ノ私家也、華士族・平民ノ其家アルカ如シ、而ノ其富ヲ論スレハ、天下ノ冠タリ、其人種ヲ論スレハ、天神ノ孫、其統ヲ論スレハ、万古一統、其恩沢ヲ論スレハ、二千五百余年海内ニ充溢ス、智者智ヲ以テ得ヘカラス、仁者仁ヲ以テ求ムヘカラス、勇者勇ヲ以テ取ルヘカラス、其至尊至重ナル如此、要スルニ天下人民ノ長々之ヲ君トナス、君以テ天下太政ノ主タルヘシ、太政官・内務・外務・海陸軍・大蔵・司法・文部・教部諸省、之ヲ政府ト称ス、政府ハ即チ国脈ヲ維持シ、君民各自保護ヲ受ル為ニ共立スル処ノ司庁トス、其官員ハ、君常ニ之ニ主タリ、民常ニ之ニ從タリ、從之ヲ臣トス、臣道式ナラス、之ヲ忠ト云、政府政ヲ得レハ、君民其慶ニ頼ル、政府政ヲ失スレハ、

君民其禍ヲ被ル、雖然君常ニ之ニ主タルノ故ヲ以テ

皇室・政府決ノ相混同スヘカラサル也、夫レ之ヲ混同ス故ニ、古ヨリ天下乱ルレハ

皇室先ツ危シ、記ニ云、天子ハ天下ヲ以テ家トシ、中国ヲ以テ居トスト、永安ノ道ニ非ル也、

皇室・政府既ニ其別アリ、則

皇室ノ禄制セサルヘカラス、君民ノ所有分タサルヘカラサル也、蓋シ天下ノ土地・田園・山沢、古来之ヲ人民ニ屬スト雖モ、詳カニ之ヲ論スレハ、悉ク是レ君民ノ共有タルヘシ、特ニ未タ嘗テ其經界ヲ不為、人民税ヲ納メテ、以テ御料ニ充ツ、而シテ之ヲ納ムルニ、御料ト政府ノ費用トヲ別タス故ニ、後世租税ハ一切ニ政府ノ費用トシ、御料ヲ備ルハ政ヲ主ルカ為ナリトシ、天下ノ土地ハ人民ノ所有ト見做スモノアルニ至ル、故ニ地券ヲ所持スレハ、之ヲ私有トス、天下ノ土地、地券ヲ所持スルモノヲ人民ノ私有トセハ、皇室ノ所有於天下幾許ソ、現在ノ官林・官地ハ一富民ノ家産ノミ、開闢以降天下ヲ有チ、今日其所有ヲ計ラハ、天下幾分ノ一必 皇室ノ所有タルヘシ、然レハ則、土地天下ニ滿衍シテ之ク処、必 皇家ノ所有アラサルナカルヘキ也、周ニ井田ノ法アリ、一井九百畝、而シテ中央ノ百畝ヲ以テ公田トス、公田ハ則チ王室ノ私有ト云カ如シ、善シ此法也、雖然周其政ヲ失テ私有地共ニ亡フハ、王室・政府ノ分ナキヲ以テ也、今海内君民ノ所有ヲ分タント欲ス、土壤ノ形井田ノ法摸スヘカラス、必ス人民所有ノ券狀ニ就テ、各其幾分ハ 皇有地、其幾分ハ民有地ト定メ、地券面ニ内訳スヘシ、而シテ 皇有地ハ万代不朽 皇室ノ私有トシ、政府ニ不関ノ其貢租ヲ人民ヨリ 皇室ヘ納ムヘシ、古ヘハ畿内ニ官田ヲ置、今ヨリ天下皇田ヲ置、政ハ則君民同治、天下ハ則君民共有、天下ノ治乱ハ専ラ 皇室ニ不関、而政府ノ仁暴ハ君民一般ノ苦楽ニ関ス、是天下ノ勢、或ハ不然ヲ得サルカ、某愚窃ニ以為ク、無窮ノ基ト、而シテ之ヲ論スルモノハ、貢賦ノ法ヲ立ント欲スルニ因レハ也

貢賦

皇室ノ禄ハ天下ノ皇田、是也、其額天下幾分ノ一ニ居ル、而ノ皇田經界ヲ為シ難シ故ニ、之ヲ天下ノ民有ト混ス、其収獲ヲ計テ常ニ其幾分ヲ納ム、之ヲ貢ト云、貢ハ、天子ノ供御祀典ノ料、官閥ノ營繕、妃嬪ノ用、皇族・華族・華族ハ之ヲ天ノ禄ニ給ス、予メ均量ヲ執テ定額ヲナス、故ニ貢ハ豐年不増、凶年不減、(斂) 官之ヲ斂メテ大内藏ニ納ル、大内子ノ家從トスノ禄ニ給ス、予メ均量ヲ執テ定額ヲナス、故ニ貢ハ豐年不増、凶年不減、(斂) 官之ヲ斂メテ大内藏ニ納ル、大内藏之ヲ収メテ用度ヲ經理ス、入ヲ量テ出ルヲ為ス、内藏ハ皇室ノ内藏也、政府ノ諸省ヲ云ニアラス、太政官及ヒ諸省ノ費用、官員ノ月給、軍旅ノ備ハ、皇室ノ禄ト士民ノ田士族田ナキモノ、今之ニ田授ク、次編ニ陳ス天下ノ戸口ニ課ノ出サシム、之ヲ賦ト云、賦ハ定額ナシ、出ルヲ量テ入ヲ為ス、府県ノ官員、其長次官ノ月給ハ之ヲ天下ニ賦ス、判任月給及ヒ使部仕丁、県庁營繕、牢獄徵役、巡邏捕亡一切ノ費用、其所轄ニ賦ス、堤防・橋梁・道路修築、其一等ハ之ヲ天下ニ賦ス、其二等ハ之ヲ所轄ニ賦ス、三等以下ハ其土地ニ賦ス、海關ノ稅ハ之ヲ天下ヘ均分ノ其賦ヲ補フ、釀造諸稅ハ之ヲ府県ノ所轄ニ均分ノ其賦ヲ助ク、其レ然リ、故ニ政府財用ヲ濫リニスレハ、君民共ニ苦ム所タリ、政府財用ヲ節スレハ、君民共ニ樂ム所タリ、樂ミモ天下ト共ニシ、苦ミモ天下ト共ニス、天下ノ治乱・安危・存亡・禍福・吉凶、君民必ス之ト共ニス、暴君汚吏ト雖モ、其將タ此政ヲ如何、唐ノ德宗兩稅ノ法ヲ行フ、出ヲ量テ入ヲ制ス、論者曰、名ハ廉ニシテ實ハ貪ト、是其專ラ之ヲ人ニ賦ス故ニ、他年輸スル所其初二三倍スルニ至ル、唐主若シ家祿アリテ共ニ其賦ヲ出サハ、自カラ其肉ヲ食ム、食ラント欲スト雖モ、得ン乎、雖然此法必民會議院ノ設ヲ俟ツ

其二

収獲ヲ計テ貢賦ヲ課スルハ、(券) 徑チニ地卷ノ法ヲ用ユヘキ歟、曰、天下ノ田園巨細悉ク其實ヲ得ルモノ、其法間然ナキ処、雖然地価ヲ以テ賦稅ノ根拠トナスモノハ、効力ニ未タ論ナキ不能処アリ、夫レ物価ノ昂低スルハ、海濤ノ風ニ從

フカ如ク動靜常ナシ、常ナキ代価ヲ拳テ常アル貢賦ヲ課セント欲ス、恐ラクハ其平ヲ得難カラン、曰、地価何ヲ以テ常ナキ、曰、米・麦ノ輕重、桑・麻ノ貴賤、地価ノ昂低ヲナス、一也、金ニ富ミ田ニ乏キモノ人ノ所有ヲ得ント欲スレハ、其高価ヲ不厭ノ之ヲ購求ス、田有リ財ニ乏キモノ田ヲ鬻テ金ヲ得ント欲スレハ、卑価ナリト雖モ止ムヘカラス、真価ニ当スト雖モ、亦昂低ヲ為ス、二也、村民富メハ地価貴シ、村民貧ナレハ地価卑シ、三也、故ニ真価ノ昂低ハ、当ト不当ト人民ノ相對ヲ以テ其時ニ定ムヘキコトナレハ、数年平均ノ物価ヲ以テ、何ゾ予メ地価ヲ定ムヘケン、縦ヘ強テ其価ヲ定メシムトモ、大略土地ノ位ヲ定ムル迄ニ、売買スヘキ代価ニハ決メナリ難シ、既ニ売買ノ代価ニアラサレハ、何ヲ以テ其當否ヲ知ラシ、知ルヘカラサレハ、地券代価ハ各村・各県ノ思慮ニ依テ、其格必齊シカラサルヘシ、而ノ其齊シカラサルヲ以テ、官ニ於テ利率ヲ設ケ、強テ其率ヲ用ヒシムレハ、必亦其實ニ不当モノアリ民戸多クノ田園少キ村落ハ地価格外ニ高シ、民戸少クノ田園多キ村落ハ地価格外ニ卑シ、利率ヲ一ニスレハ、其實ニ不當、是也、然ラハ則何ヲ以テカ地価ヲ定メン、抑モ地価ハ末也、收穫ハ本也、本ヲ舎テ末ヲ取、某愚未タ論ナキ不能処也、然ラハ則如何、曰、收穫ヲ用ヒ地価ヲ去ランノミ、曰、收穫何ヲ以テ其實ヲ得ン、曰、地価ハ收穫ヨリ生ス、收穫ハ地価ノ本也、今、末ニノ猶其實ヲ得ント欲ス、何ゾ其本ノ得難キヲ憂シ、且收穫果ノ其實ヲ得ヘキモノアリ、地価ノ動揺常ナキカ如キモノニアラサル也、乞フ、之ヲ条列ノ以テ貢賦ノ根拠ヲ立ン

第一章

詳カニ地積ヲ計リ收穫ヲ出スハ地券ノ法ノ如シ、而ノ土地ノ難易ニ依テ小作入米・金ヲ定ムルハ、其土地旧来ノ大法ニ從フヘシ、而ノ今後小作入米・金ヲ以テ村高トシ、之貢賦ノ根拠トス

第二章

貢賦台帳ヲ製シ、反別收穫・小作米ヲ記シ、地主・小作連印ノ出スヘシ、而ノ地主、小作ノ入米ヲ増サントスル、必

官ノ許可ヲ得テ増スヘシ、小作、地主ノ入米ヲ減セント乞フモ、官ノ許可ヲ得サレハ、減スルヲ得ス、苟モ私ニ増減スル、必有罰

第三章

田地売買ハ、双方連印顯出、官庁ニ於テ台帳ヲ改名スヘシ、其証書ヘハ必小作人調印スヘシ、売買代金ハ人民ノ相對タルヘシ、小作人替ルトキハ、連印ニ而届出ヘシ

但、台帳ハ十年ニ一造ス

第四章

自作地ハ最寄小作地ノ格ヲ以テ收穫米・小作米ヲ定メ、地主并隣家証人連印スヘシ

但、一村悉皆自作地、或ハ近村ニモ比較スヘキモノナケレハ、秋実ノ日ニ坪刈ノ收穫ヲ見、土地ノ難易ヲ計テ、小作肥培ノ料ヲ去リ、以テ入米ノ法ヲ創定スヘシ

第五章

畑地ハ其土地ノ田ニ比較シテ小作米ヲ定ム、是亦従前畑小作ノ大法アルニ從フヘシ

第六章

農ノ宅地ハ近傍ノ畑ニ比較ノ收穫ヲ定メ、小作入米高ヲ付ヘシ、町屋敷ハ借地料ヲ以テ小作入金・米高ヲ付ス、町屋敷ノ貢納ハ金ヲ以テ定ムヘシ

第七章

小作、地主ト申合セ作入米ヲ偽ル等ノコトハ無キ道理ナリト雖モ、若シアラハ、嚴科ニ処セラルヘシ、又小作入米ト貢賦台帳ト齟齬スルコトハ嚴禁タルヘシ

第八章

小作入米ヲ惣計シ村高トス小作入米ハ定メアル国ト無キ国モアルヘシト雖モ、到底収獲ノ内ヨリ種穀・肥培・耕作ノ實ヲ相当引去リタル処ヲ小作米トスルコト故、何国ニ行テモ此定メハ有リテ至当也、故ニ之ヲ以テ高トス、高ハ全ク土徳ノ生スル処ナレハ、地ヲ、而シテ仮ニ二十カ一ヲ 皇田ト定ムルトキハ、千石ノ村ニテ五十石ニ当ル、平年ノ貢額ナリ、有ツモノ之ヲ受クヘシ、
違作ノ年ニハ減租スヘシ、減租ハ仮ニ平均十カ二ト定メ、五十石ノ内十石引、残米四拾石定免ニ納メシム、是ヲ千石村ノ貢納トス、是ノ貢額ハ豊年不増、凶年不減、又千石ノ内五十石ヲ去レハ九百五十石、之ヲ村民数十戸ノ所有トス

第九章

貢額既ニ定レハ、五カ年平均相場ヲ以テ石代上納トスルモ妨ナシ、五ヶ年毎ニ更ニ相場ヲ改定スヘシ、是其ノ帰スル処、地券ノ法ト同フノ其事ノ簡ナルハ、之ニ十倍スヘシ

第十章

不毛地・秣場・野原・池治等ハ、貢賦共ニ除クヘシ、木山ハ、木材売却ノ日ニ当リ木代幾分ノ一ヲ貢納スヘシ

第十一章

開墾地ハ、二十年内外ノ年季ヲ定メ、年季明ヨリ貢賦共ニ納ムヘシ、古田ノ增高モ力功ニ係ルモノハ、十年内外ノ年季ヲ与フヘシ

第十二章

天下ノ賦金ハ天下ノ高割タルヘシ、一県ノ賦金ハ一県ノ高割タルヘシ、而シテ之ヲ出スハ 皇田・民田ノ差等アルヘカラス、 皇田ノ賦金ハ大内蔵ヨリ出スヘシ

第十三章

茶ノ税ハ製茶代価幾分ノ一ヲ収ムヘシ、生糸・蚕種ノ税ハ即今ノ如シ、其税金ハ天下賦金ノ補ニ当ツヘシ、其他物品

税都テ之ヲ賦金ノ補ニ充

第十四章

地図及ヒ貢賦台帳各二通ヲ造リ、地主・作人調印シ、府県ノ長官與印ノ、一通ハ庁ニ留メ、一通ハ下付ス、是レ國家貢賦ノ本、尤重宝トナスヘキ也

其三

或ハ曰、厚稅薄地ハ民貧ニノ戸口減損ス、薄稅良地ハ戸口増加ス、馴致ノ久シキ民產粗定ル、今試ミニ一反ノ田稅ヲ以テ論スレハ、比隣ノ村ニノ甲ハ米六斗ヲ納メ、乙ハ米三斗ヲ納ムルカ如キ、勞逸甚均量ナラスト云ヘシ、而ノ甲村ハ千石ニノ百戸、乙村ハ千石ニノ二百戸アラハ、之ヲ如何、急ニ之ヲ均平ニセハ、乙ノ民流離ノ甲ニ移ラサレハ食ヲ得ヘカラス、天下ノ広キ、何ソ之レナキヲ保セン、今之ニ均シク貢賦ヲ課シ、旧ニ比ノ減稅セハ、其民悅ハン、増稅セルモノ豈憂ヲ含マサルヲ得ンヤ、且地ノ厚薄ハ民ノ勤惰ニ係レルモノ極メテ多シ、今亦之ヲ均フセハ、惰者ノ利ニノ勤者ノ不利、人力恐ラクハ自是衰ヘン、之ヲ如何、曰ク、貢ハ必天下均シク幾分ノ一ヲ納ムヘシ、賦ハ従前ノ稅額ヲ斟酌シ、貢賦ヲ合セテ従前ノ額ヨリ増ス者ハ、二十年以内ノ年季ヲ定メ、割賦高ノ内若干ヲ減免スヘシ、年季ノ内年々其高ヲ引起シテ漸次増加スルトキハ、民自カラ其堵ヲ得、騷擾流離ノ憂ナカルヘシ、苟モ不然ハ、現地ニ於テ相當スト雖モ、民產俄ニ損益アリ、未タ必シモ天下靜然ナルヤ否ヲ知ル不能也

士族授田

明治六年十二月此草ヲ起ス、既ニノ家祿奉還ノ法出、士ノ祿ヲ奉還スルモノ水ノ卑キニ就カ如シ、依テ久シク匣裏ニ藏ム、於今之ヲ見ル、士族猶未タ或ハ其堵ヲ得サルモノアリ、故ニ復此議ニ及フ

天下ノ田租約千二百万石、而ノ士族ノ祿四百万石、奉還未タ行レサル前ノ祿也、田租三分ノ一ニ當ル、田租三分ノ一ヲ蠲

ハ、則農四百万石ノ粟ヲ剩ス、於是農ニ命ノ田産ヲ量リ、四百万石ノ作益ヲ収ムヘキノ地ヲ出ス、農ニ於テ其産ヲ損スルナシ、之ヲ以テ士族ニ授ク、士族其田ヲ受テ其禄損セス、天下ノ士萃テ田土ニ就クコトヲ得、於是貢ヲ収メ賦ヲ課スルニ新制ヲ以テス、新制ノ施ス所、士農維一、其族ヲ問ヘハ即チ士、其事ヲ問ヘハ即チ農、徵兵招募其勇ヲ択ミ、任官登職其賢ヲ撰ム、徒手素餐ノ人一朝地ヲ掃テ尽ク、富国強兵ノ策之ヨリ急ナルハナシ、蓋シ田ノ税アル、中葉以前二十ニ一ヲ取ルニ不過ト云、豊臣氏ニ至テ漸ク之ニ十倍スルハ、啻ニ奢侈ノ資トナスノミニアラス、盛ンニ天下ノ兵士ヲ養ヘル也、今其古ノ兵士ヲ土ニ着ント欲セハ、宜シク田租ヲ復古スヘシ、田租古ニ復セスノ士ノ禄ヲ収ム、之ニ易ルニ金ヲ以テスト雖モ、恐ラクハ未タ悉ク其業ニ就ク不能モノアラン乎、曰、田租ヲ減ノ農田ヲ士族ニ授ク、其法允当、雖然富田ノ民ハ地ヲ裂テ出スモ妨ケナカルヘシ、其貧戸僅々ノ所有ヲ裂ント欲セハ、何ソ歎訴セサルヲエシヤ、且其田僅々所在ニ星布ノ士族ノ所有トナス、士族モ亦其地ニ就テ耕ント欲スト雖モ得ヘカラス、曰、如斯ハ金ヲ以テ其民ニ償ハシムヘシ、假令ハ米壹斗ヲ減スレハ壹石代金凡六円トス、代金六拾錢也利子壹割トス、此地代金六円トス、地主ヨリ一旦之ヲ官ヘ収メ、以テ家禄奉還ノ士族ニ与フヘシ、則是十年ノ禄也、是則六年ノ禄ヲ与ヘテ地所半価払下ノ法ト粗相適ス、抑士族ノ志一ナラス、金ヲ欲スルアリ、地ヲ欲スルアリ、農ノ志不一、地ヲ出スアリ、金ヲ出スアリ、則其金ヲ欲スルハ金ヲ与ヘ、地ヲ欲スルハ地ヲ与フ、其權衡ヲ執テ之ヲ鈞量スルハ政府ニアリ、何ソ必シモ僅々ノ所有地ヲ裂テ其民ヲ煩ワシムルヲ用ヒン、於是乎、天下ノ士民其レ一ニ歸スルニ庶カラン矣、依テ平民ヲ廢ス平民ノ稱ヲ廢ス士トス、以テ天下ノ義務ヲ實ムヘシ

今案スルニ、授田ノ法ハ貢賦ノ法立、而ノ後ニ之ヲ挙クヘシ

学テ以テ位ニ居、天下ノ義務ヲ担任スル、之ヲ士ト云、耕稼陶漁工商以テ上ニ供シ身ヲ養フ、之ヲ平民ト云、士民ヲ一ニノ与ニ国家ノ義務ヲ担任セシメント欲ス、士豈可廢乎、所謂平民ヲ廢スルトハ、農工商ヲ廢シ、徒然トノ坐食セシメ、袴被双刀傲然トノ跋扈セシムルノ謂ニアラス、其義氣ヲ養ハシムルノミ、蓋シ古ノ法ヲ立ル、士農維一、海内皆兵、其俊秀ヲ挾拔シテ以テ士ト為ス、士ハ則平民ノ俊秀卓絶者ノ称ニシテ始ヨリ人種ノ異アルニ非ル也、故ニ平民学ヘハ以テ士タルヘシ、士モ亦慢レハ以テ平民ノミ、是以人民競テ文武ヲ講習シ、上ニ位シ下ニ臨ミ強ヲ抑ヘ弱ヲ扶ケ、各国家ノ義務ヲ担任セント欲ス、故ニ士ハ必忠義廉恥アリトス、士民ノ称相分テ以テ人民ヲ勸励スルモノ古ニ在テ、最モ応ニ良制ト云ヘキ也、然リ而ノ世降リ政衰ヘ、士ハ賢不肖トナク其禄ヲ世ニシ、平民智愚ヲ不論田野ニ負担スルニ至テハ、先ニ勸励ノ具タルモノ、彼ヲノ概ノ不学無術ノ士タラシメ、之ヲノ概ノ卑屈無機ノ民タラシム、流弊ノ如斯豈済フ無ルヘケンヤ、是時ニ当テハ、士モ亦必シモ忠廉ナリトセス、平民必シモ不忠廉ナリトセス、然則士民何ゾ挾ハン、而ノ平民ヲ廢ノ士ト為スヘシト云、爾モノ抑モ有説也、国ノ外侮ヲ受ルハ国自立ノ權ナキヲ以テ也、国自立ノ權無キハ人民ノ自立スル不能ヲ以テ也、人民自立スル不能ハ其義氣ナキヲ以テ也、其義氣ナキハ政府ノ抑制ヲ受レハ也、其抑制シ易キハ称ノ平民ト為ハ也、故ニ平民ハ其義氣無キヲ分トシ、政府ハ其抑制ヲ常トス、蓋抑制ノ政ハ君主專治ノ世ニ行フヘシ、君主專治ハ海外隔絶ノ日ニ施スヘシ、今敵国海外ニ森列シ睚眦必報ユルノ時ニ当リ、人民ノ義氣ナキ如此ハ、何ヲ以テカ之ヲ防カン、幸ニ士ノ義氣猶或ハ存スルアリ、齒間ノ物ヲ挾ルカ如キハ抑モ亦国家ノ障壁、凡ソ事其任ニ非レハ責ムヘカラス、平民ニ天下ノ義務ヲ責ルハ、子ニ父道ヲ責メ婦ニ夫道ヲ責ルカ如シ、誰カ能ク其訓ヲ受ン、嗚乎天下ノ士平民ト為スヘカラス、而ノ天下ノ平民士トナスヘキハ、天下ノ義氣ヲ旺ニシ、国家自立ノ權ヲ有ノ、三千余万ノ人民与ニ一分ノ責ヲ負ハシムル所以也、天下ノ人民豈士為ルヘカラサル者有ン哉

賁士道

天下ノ人民既ニ為士、其官ニ在ルヲ仕士ト云、不仕ノ禄ヲ受ルヲ遊士ト云、田ニ在ヲ農士ト云、衢ニ在ヲ商士ト云、工士ト云、雜士ト云、各其職ヲ以テ之ニ名ク、之ニ責ムルニ士道ヲ以テシ、之ニ習ハスニ士道ヲ以テシ、之ヲ將ユルニ士道ヲ以テス、律庶人ノ条ヲ削リ、衣服冠屨士ニアラサル無シ、礼貌言語士ニアラサルナシ、春夏ハ教ルニ文ヲ以テシ、秋冬ハ教ルニ武ヲ以テス、冠昏喪祭必軍礼ヲ以テシ、學校教院必軍令ヲ以テシ、家必銃砲兵器ヲ貯ヘテ之ヲ春秋ノ獵ニ試ミ、伍保長アリ、以テ將校ニ屬ス、丁壯ヲ挾テ常備トシ、老少悉ク予備ニ充ツ、夫レ如斯ハ、天下ノ人民兵ニアラサルナシ、天下ノ兵士ニアラサルナシ、然則人民ノ義氣前日ニ倍スル、万々外寇惧ル、無ルヘキ也、交際讓ラサルヲ得ヘキ也、当其盛ハ欧米ノ堅甲利兵杖ヲ作テ撃タシムヘシ、蓋復古以來百事面ヲ革メ、專制ノ權ヲ抑損ノ平民ノ權利ヲ暢、其苗字ヲ免シ、乘馬ヲ免シ、立札ヲ免シ、華士民ノ婚姻ヲ許ス等、士民ヲ一ニスルノ事ニ非ルナシ、雖然平民ノ權利未タ士ニ不及、而士猶平民ト伍セサルカ如キハ何ソヤ、專ラ士ヲ下スニ志アルヲ以テ也、下スト雖モ降ラサルハ、士ノ義氣猶或ハ恃ムヘキ也、上スト雖モ上ラサルハ、平民ノ稱廢セサレハ也、曾テ穢多ヲ廢ノ平民トス、穢多ノ喜疆リ無フノ平民自若タリ、若平民ヲ稱ノ穢多ト云ハ、穢多ニ於テ悦フ処無フノ、平民ノ怒必甚シカラシ、是平民ノ義氣恃ニ足ルヲ知ルヘキ也、今士族ヲ廢ノ平民トナス、猶平民ニ於テ悦フ処無フノ、士ノ平ナラサルモノ天下亦幾于ヲ知ルヘカラス、夫レ天下ノ生民義氣アラサルナシ、義フニ其道ヲ以テセサレハ、則廢ス、天下ノ人民王臣ニ非ルナシ、処スルニ其道ヲ以テセサレハ、王事ニ服スルヲ為サル也、曰、予ハ農、予ハ商、於國家何ソ与ラシ、義氣予ニ於テ何ソ用ヒン、嗚乎是天下ノ民ヲ自ラ相率テ不廉不恥ノ域ニ入ラシム、而ノ國家獨立ノ權アルモノハ特ニ神聖ノ威靈ニ由ルト謂ハサルヘケンヤ、今人民拳テ士タリ、之ニ教ユルニ士道ヲ以テス、曰、義務ヲ知ラサルハ士ニアラサル也、廉恥ヲ知ラサル者ハ士ニ非ル也、國家一分ノ責ヲ逃ル、モノハ士ニ非ル也、天下ノ人民士タラサ

ルハ人ニ非ル也、人民何ノ憚ル処アリテ權利暢ヒサラン、權利既ニ暢レハ政府ノ權不抑ノ自カラ其均ヲ得、權利其均ヲ不得ハ民進ム、進メハ則可用也、凡國家ノ寇ヲ拯フハ、宜シク田舎ノ民馳集ノ同郷ノ火災ヲ拯フカ如クナルヘシ、曾テ兄弟骨肉ノ姻アルニ非ル也、給祿扶助ヲ受ルニ非ル也、而ノ一タヒ其急ヲ聞ケハ、一郷挙テ之ニ方ヒ防具ヲ携ヘ馳突撲滅ス、曾テ一人ノ消火夫アルニ非スノ一郷挙テ消火夫タリ、吾曾テ之ヲ視ル、都府ノ火ノ如キハ不然、近ケレハ自カラ防キ、遠ケレハ馳セテ之ヲ視ル、數千百人馳集ノ火ヲ拯フモノハ僅々ノ消火夫ノミ、其焰烟盛ナルニ当テハ、各其家ヲ顧ミテ蛛散ス、數千百人又何ノ用ゾ、常交ノ厚キ田舎ノ如キハ天下ノ寇可防也、情交ノ薄キ都府ノ如キハ一郷ノ寇不可防也、夫上下隔絶スレハ猶都府ノ人ノ如シ、曾テ隣戸ノ主人ヲ知ラサルモノ往々之レ有リ、隣戸賊アレハ戸ヲ閉メテ不出、上下相親メハ田舎ノ如シ、一郷相知ル、隣戸賊アレハ鼓鐘ノ之ニ赴ク、曰、兵ハ精ナルヲ欲ス、多キヲ不欲、曰、然リ其精ヲ擢テ常備トス、定員アリ、其余ハ予備トス、國家大寇アルニ非レハ、之ヲ濫ニ発スルナシ、之ヲ日常行ノ上ニ習ハシ、之ヲ非常ノ事ニ用ユ、精ナラスト雖モ、亦以テ為スコトアルニ足ルヘキ也、嗚乎是士タルノ責果ノ追レサル処ニ在矣乎

征韓ノ義務独リ之ヲ兵ニ委スヘカラサルヲ論ス

韓ノ可討久シ、而ノ政府ノ怨ノ今日ニ至ル、強ノ弱ヲ待ツ所以、宜シク斯ノ如クナルヘシ、慰諭百端彼レ頑トノ不省、益ス不敬ヲ重ヌ、德眞舜ノ如シト雖モ、仁周文ノ若シト雖モ、奚ソ復之ヲ不問ニ処セン、頃日新ニ聞、政府黒田陸軍中將ニ命メ、特命全權弁理大臣トシ鎮兵ヲ帥ヒテ之ヲ朝鮮ニ遣ル、使命如何知ルヘカラスト雖モ、彼ノ君臣ノ罪遂ニ免ルヘカラサルモノ、蓋シ遠キニ非ル也、皇國ノ臣民領ヲ延テ其捷聞ヲ俟、夫レ兵ハ凶器、戰ハ危道、固ヨリ喜フモノニ非ル也、雖然國脈ヲ維持シ独立ノ權ヲ立ルモノ、何ソ兵力ニ拠ラサルヲ得ン、征韓ノ挙タル、國家ノ義務近キ

ヨリ遠キニ及ヒ、小ヨリ大ニ及フ、豈之ヲ大恥ヲ忘レテ小恥ヲ慍ルモノトセン、大固ヨリ忘ルヘカラス、時未タ可ナ
ラサルヲ以テ耳、然リ而ン兵ヲ用ユル、独リ之ヲ兵ニ委スヘカラス、内治ノ道、理財ノ方宜シク詳カニ論弁固守ノ、
国民ヲノ 朝旨ノ在ル処ヲ勤メシム、將外ニ在テ内顧ノ憂ナク、相内ニ在テ糧食ノ虞ナシ、兵ヲ千里ノ外ニ出シテ上下
静然、是豈大業ヲ成ス所以ノ道ニアラスヤ、請フ、先ツ国用ヲ足シ、人民ヲノ殷富ナラシムルノ方ヲ論セン、夫レ歛ヲ厚
フセヌン府庫充チ、税ヲ増サスノ国用足ル、王安石ノ術ヲ以テスレハ、司馬光ノ駁固ニ允當、雖然歛ヲ厚フセヌン府
庫充チ、税ヲ増サスノ国用足ルハ、即亦是堯舜禹湯文武ノ天下ヲ有テルユエンニ、先聖孔子ノ祖述スル処、而ン我
カ先師二宮尊徳ノ宗トスル、是ヨリ要ナルハナシ、曰、何ヲ以テ府庫充チ、何ヲ以テ国用ヲ足サン、曰、儉ト勤トノ
ミ、天下ノ人誰カ勤儉ノ貴キヲ知ラサラン、天下法ナケレハ、勤儉得テ行フヘカラサル也、今歛ヲ厚フセヌン府庫充
チ、税ヲ増サスノ国用ノ足ランコトヲ欲ス、法ヲ設ケテ天下ノ人民ヲ束縛シ、必ス勤ト儉トニ依ランシム、之ヲ犯セハ
則有罰、一曰、土木・皇宮ノ經始・官省ノ營繕ハ勤メテ国風ノ樸實ヲ貴フヘシ、官員・華士族・平民ノ居室壯麗ニ過
キ、或ハ西洋ノ風ヲ擬スルヲ禁ス、都鄙学校教院ハ大概寺院ノ故宅ヲ用ヒ、不便宜止ヲ得サルニ非レハ新築ヲ許サ
ス、専ラ外飾ヲ勤ムルヲ禁ス、二曰、常服、衣冠、羅紗錦繡、貴賤貧富必有等、三曰、器玩・懷中時計・指環・金
鈿・甲又ノ類及中外ノ玩器、一切之ヲ禁ス、四ニ曰、冠婚喪祭ノ礼、数ヲ定メ、貴賤貧富等ヲ分テ之ヲ行フ、五ニ
曰、上下礼服ハ一般ニ内国ノ産ヲ用ユ、天下既ニ此法ヲ遵守ン儉ヲ行ヒ余財アリ、試ミニ天下三千五百万人、人毎ニ
金壹円ヲ儉スレハ三千五百万円、況ヤ儉奢ノ分豈数量ノ及フ処ナランヤ、専ラ内国ノ産ヲ用ヒテ之ヲ海外ニ仰クヲ須
ヒス、国産剩リアリ、之ヲ海外ニ輸出ス、彼レ恒ニ我レニ須ツコトアリ、而ン我レ必シモ彼レニ須ツコトナケレハ、貿
易ノ權衡我ニ重シ、權衡我ニ重ケレハ、国家富強坐ノ俟ツヘシ、儉ノ利用豈大ナラスヤ、於是乎勸業ノ術ヲ盛ンシ
殖物富産ノ基ヲ開ク、舟車ヲ造リ鐵路ヲ拓テ運輸ヲ便ニス、天下人民ヲノ各意ヲ茲ニ用ヒシムレハ、幾千万ノ大工役

ト雖モ必竣功守成ヲ保スヘシ、故ニ勸業ノ術タル、儉ヲ以テ本トス、勤之ニ亟ク、勤儉ニノ天下窮乏スルモノハ未タ之レアラサル也、請フ、復法ヲ以テ天下人民ヲ勤ナラシメメン、一ニ曰、勸業ノ資本ヲ立、府県ニ依托ス、二ニ曰、勤儉者授標法ヲ以テ選舉シ、賞典ヲ賜フ、三ニ曰、荒蕪開拓、水利ノ備、桑茶栽培、百穀樹芸、百工開場、新規發明、其財本民力ノ及ハサルハ、資本ヲ貸ノ之ヲ開カシム、息ヲ不収十年以内ノ年賦ヲ以テ元金ヲ返償セシム、凡ソ資本ハ主トノ無利足貸付ヲ為スヘシ、年賦返納循環不息ハ永ク本金ヲ失フヘシ、四曰、各府県勸業会社ヲ開キ、農工実学ノ良教師ヲ挙テ社中ニ教諭ス、五曰、勸業資本ヲ貸ノ開ケル処ノ土地ノ租・河渠ノ征・百工ノ税ハ、悉ク之ヲ勸業資金ニ加フ、六曰、富民善志アリテ勸業資金ヲ献納スルモノアレハ、之ヲ許ス、七曰、遊戲ヲ禁シ、淫声ヲ停メ、其人ヲノ職ヲ革メシム、是其大要、其詳カナハ今焉ニ悉スニ不遑也、抑勤儉二者ハ富國ノ基、二宮氏ノ匹夫ニ起リ諸侯ノ國ヲ興セシユエン、即是歛ヲ厚フセスノ府庫充チ、税ヲ増サスノ國用足ルノ方、堯舜禹湯文武ノ天下ヲ有テルモノ、焉ソ亦斯法ニ由ルニ非ルヲ知ランヤ、且尊德言ルアリ、我カ神州ノ闢ケル、始メ資本ヲ外域ニ借ルニアラス、器械ヲ異域ヨリ伝ルニアラス、天祖自カラ農器ヲ製シ、其始一歛ヨリノ千万歛ニ及ヒ、一步ヨリノ千百町歩ノ田ニ及ヒ、獲ル処ノ粟ハ其半ハヲ食ヒ、半ヲ余ノ開拓ノ資トナス、年々歳々不息不怠、而ノ終ニ葦原ヲ開テ安國ト為シ賜ヘリ、天祖國ヲ開クノ法ヲ以テ國ヲ開ク、何ノ國カ開クヘカラサラン、天祖國ヲ富スノ法ヲ以テ國ヲ富ス、何ノ貧國カ富スヘカラサラント、嗚乎勤儉二者寧ソ法ヲ以テ人民ヲ束縛スルモ、坐ノ怠奢衰窳ノ秘ヲ俟ニ執レ、今我政府國家ノ義務ヲ尽サント欲ス、論者喋々、或ハ自カラ卑弱ニシ、人民ノ意氣ヲ沮ム、政府豈利害得失ヲ察セサランヤ、時機既ニ然ルノミ、内治ノ道、理財ノ法、亦何ソ他ノ論說ヲ容ルヲ用ヒン、只是ノ勤儉ノ法ニ於テ、未タ全ク施サ、ルカ如キヲ見ル、人或ハ師ヲ見テ矢ヲ矧クノ毀リアランモ、終ニ百代欠クヘカラサルノ法、何ソ之ヲ國家大事ノ秋ニ忽ニセン、庶幾クハ、糧食続カサルノ虞ナケン乎、征韓ノ義務独リ之ヲ兵ニ委スヘカラサルヲ論スルハ、之カ為也

時辰機

〈省 略〉

理財

輸入ノ物価輸出ノ物価ニ踰ユレハ、則内国ノ金貨終ニ匱ク、識者ヲ俟テ后ニ知ルヘカラス、然レハ則内国ノ金貨ニ富ント欲セハ、輸入ヲ減ノ輸出ヲ益サンノミ、前論既ニ其大要ヲ見ル、古人曰、上ニ益セハ下損スト、今上ニ益スニ非スノ大ニ下ニ損セル、焦眉ノ急アリ、古人未タ視ルニ及ハサル歟、苟モ之ヲ舍テ拯ハスンハ、三年ヲ不俟ノ天下ノ農民溝壑ニ転ノ死セン、然リ而ノ之ヲ拯フ術アリ、上ニ益ノ下損セス、古人未タ察スルニ及ハサル乎、安石青苗ノ法、今ヲ以テ之ヲ行ハ、亦庶幾ハ司馬光ノ譏ヲ免レン、何ヲカ焦眉ノ急ト云、田租金納ノ法是也、夫レ金納ノ法タル、運搬耗減ノ費ナク、舟楫覆没ノ患ナシ、上下ノ便之ヨリ大ナルナシ、先儒曾テ此論アリ、雖然農穀ヲ鬻テ金ニ換ヘ、以テ田租ヲ納メントスレハ、必ス商ニ依ラサルヲ得ス、商戸予メ農戸ノ金ニ乏シキヲ知レハ、日ニ益ス穀価ヲ墮ノ其窮スルヲ待、窮ノ后ニ之ヲ鬻ケハ、半価ト雖トモ、商戸視テ喜コビス、其損耗ノ大ナルヲ憂ヒテ金戸ニ依頼スレハ、利子亦常ニ数倍、期限ニ迫レハ、幾許ノ損耗ト雖モ顧ミルニ不遑、則二石ヲ以テ一石ノ貢租ニ充ツルニ至ル、且天下ノ金幣民間ニ散布スルモノ限リアリ、一時之ヲ以テ貢租ニ納レハ、金幣地ヲ払テ尽ルト雖モ、蓋シ全額ニ充ルニ不足也、農民ノ疾苦、識者ヲ不俟而可知也、夫レ下ニ損スル彼レカ如ク、而ノ上ニ益スモノ幾子ソ、一モ有ルコトナシ、是豈理財ノ宜シキヲ得タルモノトセンヤ、之ヲ拯フ道アリ也ヤ、曰、黃稻錢ヲ貸ノ之ヲ拯フ、上下坐ノ其利ヲ得ヘシ、其法一歳ノ貢金春三月ヲ以テ皆納ノ期トス、而ノ一月ヨリ三月ニ至月毎ニ其十分ノ一ヲ収メ、余ス処七分、此月ヲ以テ皆納ヲ乞ヒ、及ヒ其幾分ヲ納ルモノハ、之ヲ許ス、七分黃稻錢ヲ貸ス、其米ヲ取テ郷倉ニ置キ、之ヲ以テ

質トシ、管鍵ヲ官ニ藏ノ、戸長ヲノ非常ヲ警メシム、其本金ヲ七分シ、四月ヨリ十月ニ至ル月毎ニ其一分利子若干ヲ添テ之ヲ納メ、其質ヲ七分ノ之ヲ返付ス、黃稻既ニ登ルノ日ニ至テ、全額始テ皆取スルヲ得ヘシ、夫レ官ノ歲出必一時ニ於テスルモノニアラス、一年十二月次ヲ以テ之ヲ出ストキハ、歲入モ亦月次ヲ以テ之ヲ取ルモ妨ケナシトス、天下ノ穀必一時ヲ以テ消尽スルモノニアラス、月次ヲ以テ之ヲ食フ、之ヲ鬻クニ月次ヲ以テシ、之ヲ納ムルニ月次ヲ以テスレハ、農金ニ苦マスノ、商穀ニ俟ツコトアリ、穀価其平ヲ得テ民其利ヲ不失、之ヲ収ムルニ月次ヲ以テシ、之ニ益スニ息ヲ以テシ、之ヲ出スニ月次ヲ以テシ、金幣空シク府庫ニ淹ラサレハ、官其利ヲ得、官民其利ヲ得テ天下富強、黃稻錢ノ利豈大ナラスヤ、夫官法ヲ設ケテ人民ノ業ヲ勸ム、幾千万ノ資本ヲ用テ鼓舞スト雖モ、理財ノ法宜キヲ不得ハ、衣ヲ授ケテ屋ヲ褫フ也、民焉ソ凍死セサルヲ得ン、嗚乎上ニ益セハ下損スルハ古今ノ通論、上ニ益ノ下不損モノハ、吾レ黃稻錢ニ於テ之ヲ覩ル、此法也、今ヲ拯フノ活法矣夫